

ルパン 3 世 & 幻想水滸 『始皇帝の宝玉』

マチカネ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本にやってきた坊ちゃん、渡来人（わたり くと）と名乗り、自転車で気ままな旅をしている。

今回は商店街の福引で豪華客船、戸羽丸の乗車券を当てたので、船旅を楽しむことに。

戸羽丸のオーナーの赤間忠則（せきま ただのり）が知事をしている赤間学園、二年生も修学旅行で乗船。仲の良い小林遼、赤間秋穂、大津七美も豪華客船を楽しみに思う。

赤間忠則はイギリス人のイーニマス・ベアードから45・50carat宝石『始皇帝の宝玉』を買い取る取引をしていた。

その『始皇帝の宝玉』を狙うルパン一味も乗船、ルパンを追う銭形警部も戸羽丸に乗り込む。

さらに船にはシージャックを目論む炎輝（イエンフウイ）と克己（かすみ）たちも乗り込んでいた。

だが、出港した戸羽丸を待ち受けていたのはシージャック以上の恐ろしい惨劇。

ルパン3世と幻想水滸伝のクロスオーバー小説です。展開はホラー。

目次

第1章 集合	1
第2章 シーシヤック	10
第3章 シップ・オブ・ザ・デット	26
第4章 『ソウルイーター』	45
エピローグ	60

第1章 集合

「行ってしまわれるのですね、坊ちゃん」

玄関の前に立っていた勇ましさを隠すことなく溢れ出させている女性、クレオが緑色のマントを片手に尋ねる。

クレオの隣には鍛え上げた筋肉質の大男のバーンが立っている。2人とも寂しさと悲しさを含んだ表情。

クレオもバーンも、今は亡き、坊ちゃんの父親、百戦百勝將軍と呼ばれたテオ・マクドールの部下だった。

クレオの差し出したマントを受け取る、可愛さとカッコ良さがバランスよく共存する面立ちの優しそうな少年、坊ちゃん。背が低いので、どこかしら、幼く見える。

「うん、ジョンストン都市同盟軍とハイランド王国軍の戦争も終わつたし、それに僕が帰ってきていることも噂になり始めているからね」
空には、かつてのこの国の名前を懐かしむように少し赤味があった満月が佇んでいる。それを取り囲むように、たくさん星々が輝きを放つ。

その輝きは坊ちゃんの旅立ちを見守っているように見えた。

この時間、首都グレックミンスターの民はほとんど眠っているだろう。だから、出発にこの時間を選んだ。昼の真っ只中なら、大勢の人が押し寄せてくるかもしれない。

「しかし、グレミオの料理を食べられ無くなるのは辛いな」

バーンは旅支度を整えている長身の右頬に十文字傷のある青年に声を掛けた。

「全く、お前は食べることばかりだな」

クレオは激しく突っ込む。クレオに言われたわけではないが、バーンは急に真剣な表情になる。

「グレミオ、坊ちゃんのこと頼むぞ」

荷造りを終えた青年、グレミオ。

「勿論です。それが私の誓いですから」

無意識に頬の十文字傷に触れる、グレミオは、この傷に坊ちゃんを

守ると誓いを立てた。彼の愛用の斧の柄にも、その誓いが刻み込まれている。

「さて、そろそろ、行こうか、グレミオ」

坊ちゃんは自分の荷物を背負う。

「はい、クズグスしていたら、レパントさんが止めに来るかもしれないね。坊ちゃん」

レパントは戦友にして、この国の初代大統領。

「いつてらっしゃい、坊ちゃん」

「またな」

クレオとバーンに見送られた旅立つ、坊ちゃんとグレミオ。一度、振り返った坊ちゃんはわが家を眺める。その胸中には様々な思いが流れていた。

キャンピング車のペダルを漕ぐ、小柄な少年。頭には緑色のバンドナ、縛っている左端は紫。袖を折りたたんだ白いシャツの上に黄色い縁取りの入った赤いロングベスト、ズボンには茶色。手に革の手袋をはめ、背中には黒いロッドケースを背負う。

風の中に潮の香りが漂ってきた。海が近い証。

こっちの世界に来て、いろんなところを旅して回った。寒いところ、熱いところ。いつの時代も、世界は新しいものを見せてくれる、だから、飽きない。

「その少年、道を尋ねたいのだが」

声を掛けられたので、ペダルを漕ぐのを辞め、自転車を止める。

声を掛けてきたのはトレンチコートとソフト帽を被った中年男性。

「本官は怪しいものではない、銭形（ゼニガタ）警部というものだ」

警戒心を解くために名乗る銭形警部。

「僕は渡、渡来人（ワタリ クルト）」

相手が名乗ったので、こちらにも名乗る。この名前は、こっちの世界で名乗っている名前。ちなみに生まれた世界では坊ちゃんと呼ばれ

ていた。

「すまんが、戸羽丸（トワマル）に乗るには、どの埠頭へ行けばいいか、分からないかね」

銭形警部は方向音痴ではないが、ここは初めての場所、船に乗るからには遅れるわけにもいかないので尋ねた。

「それなら、ちょうど、僕も戸羽丸に乗るんです。くじ引きに当たって」

先日、旅に必要な物を買ったところ、福引券をもらったので、ガラガラを回すと、金色の玉が出てきて、戸羽丸の乗船券が当たったのである。

「よかったら、一緒に行きませんか？」

屈託のない笑顔。土地勘はともかく、長いこと旅をしている来人の方向感覚は研ぎ澄まされている。初めての場所でも、迷うことはあまりない。

「それは助かる。ありがたい」

目的の豪華客船、戸羽丸の前に来た来人と銭形警部。

総トン数、50, 142トン。全長、240. 96メートル。垂線間長、205. 0メートル。全幅、29. 60メートル。全客室、260室。全体的に白く、船縁は黒く塗装されている。豪華客船の名前に相応しい、戸羽丸の荘厳な姿。

赤間財閥3代目、赤間忠則（セキマ タダノリ）がオーナー。

「ほー、やはり、写真と実物では迫力が違うな」

戸羽丸を見上げた銭形警部は感心。仕事でもなければ乗る機会などないだろう。

背後から、がやがやと声が聞こえてきた。何気なく、来人と銭形警部が見てみると、修学旅行の高校生たちが集まってきた。

銭形警部の目が学生たちの胸のエンブレムに向く。

「あのエンブレムは船のオーナーが理事長をやっている、赤間学園ものではないか」

赤間学園、正真正銘のお坊ちやま、お嬢様学校、着ているブレザー

も見るからに高級品。学園の創立者は忠則の祖父。

「では、仕事があるので本官はこれで失礼する。案内、実に助かった。ありがとう」

お礼を述べてから、銭形警部は乗船口へ向かう。

「僕も行くか」

戸羽丸の駐車場にキャンピング車を進める。内心、船旅にうきうきしている、それもこんな立派な船で旅が出来るのだから。何歳になっても、子供心は失っていない。

乗船口に白い髭を生やしたお爺さんと100キロを超える黒い帽子とスーツを着た髭面の巨漢。ゴルフバックを背負った鼻の高いドレッドヘアのサングラスの男の3人組がいた。

「息子たちがのう、儂の88の祝いに船旅をプレゼントしてくれたのじゃ。ありがたやありがたや」

手を合わせ、お爺さんは拝むように感謝。後ろにいた息子らしい巨漢とサングラスの男は会釈。

赤間学園の生徒たちも乗船してくる。学園生活でも修学旅行は、最も楽しいイベントの一つ。お坊ちやま、お嬢様学校の生徒達でもはしやぐのは無理もない。

皆、これから始まるであろう楽しい修学旅行に思いをはせていた。「秋穂のお父さんはすごいよな。こんな船を所有してるなんて」

腕白坊主が、そのまま大きくなったような高校生、小林遼（コバヤシ リヨウ）が船内を見回す。まだ入口なのに宮殿を思わせる豪華な造り。

「パパったら、3代目って言われること気にしていたから、曾祖父や祖父が出来なかったことをやりたいのよ」

ウェーブのかかった茶髪の絵にかいたようなお嬢様風美少女が口を尖らせる。彼女は赤間忠則の一人娘、赤間秋穂（セキマ アキホ）。お坊ちやま、お嬢様学校の赤間学園の中でもトップクラスのお嬢様。「でも、そのおかげで豪華客船で修学旅行なんて、素敵なこと出来るん

だから、その点は感謝してるよ」

秋穂とは対称的にお嬢様らしさをあまり持っていない少女、大津七美（オオツ ナナミ）が言う。七美は陸上で学園代表にも選ばれた根っからのスポーツウーマンで遼の幼馴染み。

「そうかな、遼もそう思ってる?」

いきなり、話を振られた遼。

「そうだな、楽しかったらいいんじゃないか」

別に興味が無いわけではなく、これが遼の正直な感想。

3人仲良く、雑談しながら、他の生徒たちと一緒に奥に進む。

赤間学園の生徒たちの後には筋骨隆々の大男。スーツを着ているが、全然、似合っていない。その傍らにはドレス姿の長身のポニーテールの美人が寄り添う。2人は黙々と乗船手続きを取っていた。

誰も気が付いていないが、2人の眼差しは、旅行を楽しむ客の目付きではない。

ロッドケースを背負った来人が廊下を歩く。斜めに担いでいないと、引きずってしまう。

足の裏に床に敷かれた赤い絨毯の感触が伝わってくる。生まれ育った家やお城の絨毯と感触がよく似ている。

自分の部屋を探していると、廊下の向こうから、スーツ姿の美女がやってきた。プラチナの髪留めで髪を纏め、赤い縁の眼鏡をかけ、出るところは出て、引っ込むところは引っ引っ込んでいる。

ナイスバディの美女は手に持っている書類の束に目を通していた。すれ違いざま、そのうちの1枚が、ひらひらと床に落ちる。

何の気もなしに、来人は書類を拾い、

「これ、落ちましたよ」

美女に渡す。

「あら、ありがとう。可愛い坊や」

受け取りながら言った一言。かつて、ある美女から、同じことを言われたことがある。その美女こそ、故郷に戦争を巻き起こし、滅ぼし

た要因。

戦に勝利した側の来人も、あの戦争は忘れられない。

あの女ほどではないが、目の前の美女にも腹に一物があるのを感じ取った来人は礼儀的な挨拶をすると、その場から走り去る。

残されて美女は来人の内心に気が付くこともなく、ウブで可愛い坊やとしか思っていない。

廊下を進む、銭形警部。目の前にVIPルームの扉が見える。

一度、咳払いしてから、ノック。

「インターポールの銭形警部であります」

大声で名乗ると、少しの間を置いて、扉が開く。

一瞬、銭形警部はギョツとした。なぜなら、扉の向こうには190センチもある。青白い顔の細身の大男が立っていたから。

細身の大男に促され、VIPルームに入ると、そこにダンディな中年を絵にかいたような服装と風貌の日本人と、テーブルを挟んで向かい側に、これも英国人紳士を絵にかいたような男が座って、2人でポーカーを楽しんでいた。

「失礼ですが、赤間忠則殿とイーニマス・ベアード殿でありますか？」

答えは分かっているのだが、一応、礼儀上尋ねてみた。

「いかにも、私がイーニマス」

英国人紳士、イーニマス・ベアードが答え。

「ああ」

興味なさそうに赤間忠則が目を合わせようともせずに見える。彼が秋穂の父親。

「ルパンの予告状が届いたとの知らせを受け、参りました」

いつも通りの挨拶に敬礼。

そうだよと、イーニマスは頷く。

「銭形警部、警備隊の指揮を任せる。ルパン3世のことは君が、一番、詳しいんだろ。モンタギュー、銭形警部を案内してあげなさい」

命令を受けた青白い顔の細身の大男、モンタギューは無言で銭形警部の背後に立つ。

「今一つ、ルパンは何を盗むと予告してきたのですか？」

ルパン3世からの予告状が届いたとの一報はあったものの、銭形警部は何が狙われているのかは聞かされていない。

「君が知る必要はない。君の仕事はルパン3世を捕えること」

何がルパン3世に狙われているのか、イーニアスに話す気配すらない。

「しかし、何が狙われているのか、分からないのでは警備に支障をきたします」

イーニアスが手を上げると、銭形警部は肩をモンタギューに掴まれ、引きずられるようにVIPルームの外に出される。

外に出されながらも、銭形警部の警官としての鼻が2人とも胡散臭いと、感じ取っていた。

一番、安い3等船室に筋肉質の大男とポーニーテールの長身の美人はいた。2人とも着慣れないスーツとドレスから、迷彩色の軍服に着替えている。

「炎輝（イエンフウイ）、あいつらは乗り込んでるのか？」

「無論、後は行動あるのみ。克巳（カツミ）」

ポーニーテールの美人、克巳が尋ね。大男、炎輝が答えた。

「赤間忠則。報いを受けてもらうぞ」

何年が経とうと、どれだけの時間が過ぎようとも、克巳はあの時のことを、一日たりとも忘れてはいない。

「私、先祖たちの宿願を果たす」

100年以上も願い続けた先祖たちの目的を果たすために、炎輝は中国からやってきた。

行動を起こすのは出港後。

「いいのか、イーニアス、あんなのを乗せて」

もちろん、あんなのとは銭形警部のこと。

「問題はないだろ、君だって『始皇帝の宝玉』を盗まれたくはないだろ。邪魔だったら、モンタギューに始末させるさ」

イーニアスは3枚捨てて、3枚引く。

「俺は『始皇帝の宝玉』を買えればそれでいい」

忠則は2枚のランプを捨てて、山から2枚引く。

イーニアスはカードを展開、役はツーペア。続いて忠則がカードを展開。役はフルハウス。今回のゲームは忠則に軍配が上がった。舌打ちするイーニアス。

扉がノックされ、

「私です」

と、女性の声が聞こえてきた。

「入れ」

忠則の許可すると、扉が開く。

「紹介しよう、先日雇った秘書の峰不二子（ミネ フジコ）だ」

VIPルームにプラチナの髪留めで髪を纏め、赤い縁の眼鏡をかけたスーツ姿の美女が入ってきた。

「峰不二子です、どうぞ、よろしく」

色気爆発の不二子のスマイル。彼女の腹の内を知らないなら男なら、誰でも魅了されてしまう。

案の定、イーニアスは口笛を吹く。

『始皇帝の宝玉』？」

既に変装を解き、いつもの着物姿に戻った石川五右衛門（イシカワゴエモン）は、今回の獲物について尋ねる。肩に当てている斬鉄剣はゴルフバックの中に隠して持ち込んだ。

「かの始皇帝が徐福に命じて、見つけてこさせた45.50carat宝石。アヘン戦争の時、イギリス軍人、ベアードの手に渡り、今はひ孫のイーニアスが所有している。で、この戸羽丸のオーナーの赤間忠則が20億で買い取るんだ」

白い髭を生やしたお爺さんの仮面を剥がす、ルパン3世。

「始皇帝、中国で初めて、統一国家の秦を作った男でござったな」

『始皇帝暗殺』に出てた奴だな」

髭面の変装を解いた次元大介（ジゲン ダイスケ）はネクタイピン

の栓を取る。空気が抜け、巨漢から本来の体型に戻る。

「で、ルパン、この仕事、誰が持ってきた？」

五右工門が質問。次元大介もそれを聞いたかった。2人とも決して聞きたくない名前が一つある。

「もちろん、不二子ちゃん」

もつとも聞きたくない名前が出た。

峰不二子が関わってくると、碌なことがない。今まで、何度も味わった苦い経験。

「悪いがこの仕事、降ろさせてもらうでござる」

五右工門が立ち上がった時、出港を告げる汽笛が鳴り響く。

「どうやら、手遅れの様だな」

こうなったら、覚悟を決めるしかない。それが男の生きざまと、次元大介はお馴染みの帽子を目深に被った。

ふてくされた様に座る五右工門。ルパン3世とは目を合わせようとはせず。

ようやく、船室を見つけた来人。

部屋で荷物を整理している。グレミオがいた時は、僕がやるということでも、『これは私の仕事です』と、いつも強引にやっていた。

その時のことを思い出し、自然に頬が緩む。

右手に違和感を感じる。途端、ほんの一瞬だが、右手の甲が闇色の輝きを放つ。

何かが起こる予兆、それも凶兆。

自分の右手を見つめる来人。

「また血が流れ、命が奪われるのか……」

第2章 シーシヤック

来人は船内を歩く、考えているのは先ほどの右手の疼きと闇色の輝き。

今は何ともないが、気になって仕方がない。今まで、同じ事があつた時、碌なことがなかった。

横を清掃用具カートを押す、掃除のおばちゃんとすれ違う。

「どうしてくれるんだ！ おニューのスーツが台無しじゃないか！」
向こうのほうから、怒鳴り声が聞こえてきた。

頭の上からつま先まで、ゴロツキでありますと主張している服装と容姿の2人が立っていた。怒鳴りつけているゴロツキのスーツに滲みがついて、床に転がっているのは紙コップ。

ゴロツキ2人が絡んでいるのは遼、秋穂、七美の3人。

「しつかり、前を向いていなかった、そちらに責任があるのでは？」
恐れれず、ピシッと、秋穂は言い放つ。

秋穂の言う通り、ゴロツキの2人は雑談しながら、歩いてきたため、3人とぶつかり、その拍子にビールの入っていた紙コップでスーツに染みを作ってしまったのだ。

秋穂の言ったことは正論ではある。しかしながら、この手の輩は線論を言われれば切れてしまうもの。

「なんだと、ゴラア」

案の定、絡んでくるゴロツキ。

「やめろー！」

その前に立ち塞がる遼。秋穂と七美を守るんだ。そんな意思のこもった眼差し。

「いいのか？ お坊ちやま、お嬢様学校の生徒が喧嘩なんかしたら、即退学しになるんじゃないやねえ」

凶星、いかなる理由があるとも、赤間学園の生徒が喧嘩なんかしたら、良くて停学、悪くて退学になってしまう。

手出しできないことをいいことに、ゴロツキは遼を突き飛ばす。

慌てて秋穂が転ばされた遼に駆け寄る。

「いい加減にしなさい」

一方、七美は凄い目でゴロツキを睨み付けた。下手すれば停学や退学など、気にせず殴りかかってしまいたいような迫力。

「へへ、結構、可愛い顔してるじゃねえか」

顔を近付けてくる。

「汚い顔を近づけるな！」

的を得ていたものの、ますます、ゴロツキは頭に血が上る。

七美の方も堪忍袋が限界に達したのか、ぎゅーと拳を握りしめる。

「おばちゃん、これ借りるよ」

了承を受ける前に、清掃用具カートの中にあつたデッキブラシを一本、来人は引き抜き、

「みつともない真似は、そこまでにした方がいいよ」

ゴロツキに近づく。

「ガキは引っ込んでろ！」

見た目、来人は中学生ぐらいの子供。ちつとでも脅せば、失禁して泣き出すだろうと思ひ恫喝。

全く動じない来人にムカついたゴロツキが肩を怒らせながら、近づき、拳を振り上げる。

一歩、前に踏みだし、デッキブラシを柄を突き出す。

もろに胸に命中したゴロツキは後ろへ吹っ飛び、そのまま、舌をベロンと出して、のびる。

「てめえええー！」

残っていた沸点の低いゴロツキも来人に襲いかかった。

デッキブラシで弁慶の泣き所を打ち据え、呻いたところで頭を叩いて、ノックアウト。経験値とポッチは手に入らない。

「おばちゃん、これ、ありがとう」

清掃用ワゴンにデッキブラシを返す。

掃除のおばちゃんは唾然として、状況に着いてこれず、何も言えない。

「大丈夫ですか？」

もう遼は立ち上がって、見た目では怪我がないが、聞いておく。

「心配ない、怪我はしてないから」

そこへ騒ぎを聞きつけてきた銭形警部と警備隊が駆けつけてきた。

「おや、君は来人君ではないか？ 何があつたのか説明してもらえるかね」

来人に気が付いた銭形警部が何が起こつたのか尋ねたので、来人と3人は一部始終話す。

「なるほど、よく分かつた。最近、こんな輩が増えているな。若いもんが、まったく、嘆かわしい」

警備隊の一人が、ゴロツキがルパン一味の変装ではないかと確認してみる。面の皮は厚く、変装ではなかった。

「当たり前だ。ルパンはこんなくだらなことはないことはせん。こんな輩は、たつぷりと絞つた方がいい。連れて行け」

命令を受けた警備隊たちはゴロツキを連行していく。

「協力、ご苦労。では、これで」

敬礼をして、銭形警部も警備隊に続く。

「君、見かけは小っちゃいのに強いね。びっくりしたよ、何か武術とかやっているの？」

スポーツウーマンである七美は興味津々。

「えっと、物心ついた時から、いろいろ」

父の部下のクレオからは剣術、バーンからは拳闘。特に居候していたカイ師匠から、棒術を教え込まれた、みっちりとした。

相性も良く、来人はメキメキと腕を上げていく。ある日、カイ師匠は散歩に行くと言って、出かけたきり、帰らなかつた。

「すごい、すごいよ、君。ところで歳はいくつ、私たちよりは下と思うけど、その歳であの腕前、本当にすごい」

矢継ぎ早に質問する七美の肩を、トントン、遼が叩く。そこで初めて、まだ、名乗っていないことに、やっと、気がつく。

「あつと、失礼、ごめんね。私、大津七美だよ」

落ち着いてから、名前を名乗る。

「ええつと、僕は渡来人（ワタリ クルト）」

七美も名乗ったので、来人も名乗る。

「オレは小林遼。さつきは助かったよ、ありがとう」

遼も名乗り、お礼を言ってから、握手を求めろ。

握手を受けるが、手袋はしたまま。来人自身、失礼だと自覚はしているが、人前で手袋を外すわけにはいかない。

「あたしは秋穂。赤間秋穂」

最後に秋穂が名乗る。

苗字を聞けば彼女が、この船のオーナーの娘であることは明白。

「来人さん。助けてくれたお礼をしたいのだけど、構わないかしら」
折角のお礼を断るのは失礼だと、来人は誘いを受けることに。

遼たちのお礼は喫茶店で奢ること。喫茶店とはいっても、流石に豪華客船だけあって、結構な値段。

遠慮はしないでと、秋穂に言われたので、バイクドチーズケーキとコーヒーを注文。

バイクドチーズケーキには思い出がある。来人が物心がつき始めたころ、父親のテオの戦友の大好物。来人自身、あまり覚えていないが、バイクドチーズケーキを一斤、丸ごと食べていたのは、幼い来人には、衝撃的で記憶に焼き付いている。

月日を経て、再会した時も、相変わらず、バイクドチーズケーキを一斤、丸ごと食べていた。

「へー、来人って、自転車で旅しているんだ」

面白そうだな思いながら話しかける七美。

「でも、お前、中学生だろ、学校はどうしているんだ？」

当然、感じた疑問を遼はぶつける。

「僕を見た目よりは、年上だよ。少なくとも義務教育は終わっている年齢」

嘘は言っていない。

遼はコーヒーだけを注文していた。七美はアップルパイとアップルティー。秋穂はシナモンロールにダーズリン。それぞれの注文の

品を楽しむ。

「さっきのおじさん、あれ、銭形って人だよな」

何気なく、先程見た、銭形警部のことを口にする遼。

「でも、あの人って、ルパン3世を追って、世界中飛び回ってるんですよ。なら、あの噂は本当ってこと？」

七美の言ったあの噂。それが気に立った来人。

「あの噂って？」

意味を聞いてみる。

「ルパン3世の予告状が届いたって噂。この戸羽丸にイギリス人の資産家が乗ってて、そいつに届いたんだと」

疑問に答えてくれる遼。

「ルパン3世か、アルサーヌ・ルパンの孫。私、以前から、一度、お会いしたいと思ってましたのよ」

秋穂はダーズリンを一口飲む。

「ルパン3世……」

会えるなら、会ってみてもいいかなと、正直に来人は思う。

VIPルーム。テーブルの上に置かれた箱をイーニアスが開くと、その中には45.50caratのペアー・シエープ・ブリリアント・カットのダイヤモンドがあった。これこそが『始皇帝の宝玉』中心にいくほど金色が濃くなるグラデーション。

本来、こんな宝石に目がないはずの不二子は『始皇帝の宝玉』を見た途端、何故か禍々しい感じがして、背筋がぞつと凍り付くような感覚を覚えた。

「不二子」

忠則に促され、今しがた感じた感覚を捨て去り、白い手袋を嵌めて、ルーペをつけて『始皇帝の宝玉』を鑑定。

「本物です」

好きこそ物の上手なれ、不二子の鑑定眼はしつかりとしたもの。

そんな不二子の鑑定力を知っている忠則は1枚の黒いカードをテーブルに置いた。モンタギューが手にした機械でカードを調べ、

イーニアスの耳元で囁く。

「確認したよ。そちらも本物のようだね。これで取引成立」

箱に収めた『始皇帝の宝玉』を忠則が取ろうとした時、ドアがノックされ、

「注文のシャンパンをお持ちしました」

外から、ボーイの声が聞こえてきた。

「そうそう、さつき、取引を祝して、乾杯でもって思ってたね。ドン・ペリニオンを注文しておいたよ」

入るように指示すると、ドアが開き、ドン・ペリニオンを入れたワインクーラーの乗るワゴンを押しながらボーイが入って、テーブルの前に来た。

「おまちどうさまー」

ドン・ペリニオンの瓶を掴み、いきなり、天井に投げた。

何をやっているのか！ 忠則とイーニアスが怒鳴るよりも早く、瓶が爆発。周囲に大量の泡をまき散らす。

泡はどんどん増えていき、蔓延し始める。泡に飲み込まれた忠則とイーニアスが、プちなパニック状態に陥っている隙にテーブルの上にあった『始皇帝の宝玉』の入った箱をボーイが掴み取る。

「貴様ー！」

怒りを露わにして、泡の中を泳いできた忠則の攻撃をひよいと躲し、ボーイはワゴンの上に飛び乗った。

「貴様、ルパンかー！」

今や、VIPルーム全域に広がった泡の中からイーニアスが叫ぶ。

「ご名答〜」

ボーイの変装を剥がすと、ワゴンに仕掛けておいたエンジンを起動。凄まじい速さでワゴンは爆走、VIPルームを飛び出す。

「モンタギュー、追えー！」

主人の命を受け、泡の中から飛び出したモンタギューがルパン3世を追う。

赤い絨毯の敷かれた廊下を爆走するワゴン。警備隊が止めようと

するが、ことごとく、ワゴンに弾き飛ばされる。

「逮捕だああああ、ルパアアアアアン！」

手錠を片手に爆走ワゴンを追いかける銭形警部。だが、爆走ワゴンとの距離はどんどん開いていく。

「あばよく、銭形のとつあん」

『始皇帝の宝玉』を手にルパン3世はワゴンの上から、銭形警部に笑顔で挨拶。

廊下を堂々と歩いてきた炎輝（イエンフウイ）は、暴走するワゴンの前に立ち塞がる。

「その人、そんなところにいると怪我するよ」

ルパン3世の警告など、完全に無視して、動こうとはしない。このスピード。爆走ワゴンと正面衝突すれば、疾走するバイクと正面衝突したと同じ衝撃を受けることだろう。

怪我じゃすまない、最悪の事態もありうる。

何の躊躇することなく、炎輝は暴走するワゴンを素手で掴む。そのまま、数歩、後方へ押されたが、ワゴンは止まった。

「ウ、ウソでしょ〜」

炎輝の怪力に、ルパン3世も驚きを隠せない。

ワゴンをひっくり返され、赤い絨毯の上に投げ出されるルパン3世。

「ご協力、感謝——」

すぐに銭形警部は感謝の意を示そうとしたが、迷彩色の軍服を着ている炎輝の服装に言葉が止まる。

一番、最初、銭形警部はコスプレかと考えた。が、様子が変。それに背中に青龍刀を背負っている。

銭形警部の勘が、こいつは犯罪者側の人間だと告げた。

「うぎやあ」

そんな銭形警部を警戒することもせず、炎輝が顔を掴み、持ち上げた。悲鳴を上げるルパン3世。

さらに、強引に『始皇帝の宝玉』を奪い取った。

奪い取った『始皇帝の宝玉』を懐にしまうと、乱暴にルパン3世を

投げ捨てる。

豪華客船に敷かれた絨毯だけあって、ルパン3世を優しく受け止めた。それが幸い、怪我はなし。

「人を空き缶扱いするな！」

抗議するルパン3世の横をモンタギューが走り抜け、

「キヒャアアアアアアアアアアアアアアッ」

奇声を上げながら、袖の内側に隠しておいた、いかにも切れそうなナイフを抜き、炎輝に襲い掛かる。

炎輝の反応は早く、青龍刀を引き抜き、ナイフを受け止めた。

筋肉質の大男と、青白い肌の細身の長身の男が青龍刀とナイフを打ち合い、戦いを始める。

「ルパン、これもお前の仕業か？」

ルパン3世の横に来た銭形警部が尋ねる。

「あんなターミネーターとゾンビに知り合いはいない！」

ターミネーターとゾンビ。炎輝とモンタギューを表現する言葉としては、わりと合っている。

明らかに歓喜の表情を浮かべ、ナイフの攻撃を繰り出すモンタギュー。その攻撃の全てを炎輝は青龍刀で防御。

そこへ迷彩色の軍服を着た男たちが雪崩れ込んできた。手にはライフルなどの銃器を持っている。

男たちは、真っ先に炎輝と戦っているモンタギューに銃口を向けた。

囲まれて不利と判断したモンタギューは、さっさと逃亡。軍服の男たちも追おうとはしない。

「炎輝隊長、お怪我は？」

軍服の男の一人が、傍に来て、聞く。

「心配無用」

青龍刀を鞘に納める。

軍服の男たちのセリフ、姿勢をまっすぐに伸ばした軍服の男たちの姿勢度から、この一団の関係を窺い知ることができる。

あたりを見回してみれば、軍服の男たちは船内の制圧を始めてい

た。

「シュージャックか……」

ルパン3世に尋ねたつもりだったのだが、すでにそこにルパン3世の姿はない。

「ムツ、いつの間に」

まだ、遠くへは行っていないはず。ルパン3世の姿を探している銭形警部の前に炎輝たちがやってくる。

「銭形警部。抵抗は無し、傷つけたくはあらず」

ライフルを突きつけようとした、部下たちを制し、炎輝が言う。

この炎輝の振る舞い、銭形警部は相手が犯罪者でも、心は腐っていないことを知る。

戸羽丸にはいろいろな遊戯施設が設けられている。スロットマシンやコイン落としなどのコインゲームが楽しめる施設。ポーカーやブラックジャックなどのカードゲームが楽しめる施設。ゲームセンター等々。

来人、遼、七美、秋穂はゲームセンターに来ていた。

格闘ゲームで対戦する来人と遼。

来人が操作しているキャラクターはヘビー級のボクサー。遼が操作しているのはトンファー使いの少年。

ボクサーの連続パンチをすべてガードして、トンファー使いが26連続コンボを決め、ボクサーを倒す。

「また、僕の負け〜」

この負けだけではない、来人の連戦連敗。

がつくりする来人。ゲームとはいえ、負けるのは悔しい。

「でも、現実で戦ったら、遼ちゃんの負けでしょ」

激しい七美の突っ込み。ライの強さは七美だけではない、遼、秋穂は目の当たりにしている。

「いいことを思いつきましたわ。来人さん、私のボディガードになっていたきませんか？ バイト料ははりますわよ」

秋穂からのバイトの誘い。

「そうだね、バイトに困ったときに考えるよ」

バイトでお金を貯めて、キャンピング車で旅。資金が乏しくなった
ら、また、バイト。これを繰り返している来人。

いつもは雑誌や張り紙で決めている。

「さつきから、何だが、外が騒がしくないか？」

首を傾げる遼。確かに外が騒がしい。

「もしかして、ルパン3世が出てたりして」

興味半分で、七美が口にしたセリフ。

「ルパン3世。それなら、一目、見せてもらいましょう」

ゲームセンターの外に出ようとする秋穂。

「辞めたほうがいい、危険だ」

それを取る遼。

いきなり、激しい音を立ててドアが開き、ライフルを手にした迷彩
色の軍服の男たちが3人入ってきた。

「なんかのイベントか？」

ゲームセンターにいた船客の一人が言った。こんな豪華客船で旅
をしているものなら、最初に、そう考えてしまっても無理はない。

「みんな、伏せるんだ！」

真っ先に事態を把握した来人が叫ぶ。来人は修羅場を経験してい
る。だから、男たちの手にしている武器が本物だと分かった。

まだ、完璧に状況を把握し切れてなかったが、来人に従って、遼と
七美と秋穂は警告に従い伏せた。

まだ、他の客は状況を掴み切れておらず。

男の一人がライフルを天井に向けて撃つ。船客たちにしてみれば、
映画やテレビでしか見たことのない情景。

誰もがパニック状態に陥り、我先にと逃げ出そうとする。

「動くな、その場で大人しくしているー！」

迷彩色の軍服の男の怒鳴り声。皆の動きが止まる。

「ま、まさか、これって……」

伏せた遼は軍服の男たちに聞こえないように、小さな声で話す。
「間違いない、シージャケットだね」

こんな状況にも係わらず、来人は冷静に状況を分析。

「来人さん、あなたの武術で何とかできません？」

床に伏せたままの体制で秋穂が聞いてくる。

「……」

正直、来人は何とかできる自身はある。しかし、相手はライフルを持っていての限り、油断は出来ない。自分は平気でも、第三者に被害が及ぶ可能性がある。

「ここは、大人しくしていた方がいいと思う」

そう判断したのは、軍服の男たちに殺気を感じなかったから。さっきの銃撃も天井に向けての威嚇射撃だけ。

おそらく、この中で一番強い来人が、そう判断したので、遼も七美も秋穂も従うことにした。

廊下を進む克巳と部下たち。克巳はやや乱暴にVIPルームのドアを開ける。

忠則もイーニアスも不二子も、すでに状況を把握している。ルパン3世襲撃の残滓の泡は部屋の至る所に残っている。ただ、体に付いた泡は取って、3人とも服は着替えていた。

「目的は何だ金か？」

高圧な態度で忠則は言う。ライフルを持つ相手に対しても、見下しの態度は崩さない。

「久しぶりだね、赤間忠則」

そんな忠則に対し、微笑みを浮かべて話しかける克巳。

「久しぶりだど？ テロリストなどに知り合いなどいないがな」

ライフルの銃口を向けられても、臆する態度は見せない。

対称的にイーニアスの顔は青ざめていた。

「こう言ったら分かるかな、S国親善大使、赤間忠則殿」

S国親善大使、これを聞いた忠則の顔色が、初めて変わる。

「……何を知っている」

脅しを交えた発言だが、微かな震えから動揺が見て取れた。

「あんたが、3億ドルの義援金を横領したこと。親善大使として、S国

へ赴きながら、表向き、払ったことにして、それを横領。その罪をS国政府に被せて、内乱を誘発させた」

数年前、日本政府が払ったはずの義援金が消え、S国政府が横領したと決論が出された。本来、義援金が払われるはずだった貧困層に金が支給されず。その件で貧困層の怒りが爆発。結果、内乱が勃発。そして、多くの人命が失われた。

「ぎ、貴様、誰なんだ！」

過去の悪行が暴露され、動揺が隠せなくなった忠則。

「あの時のNPOだよ。姿は随分、変わっているけど」

当時、貧困に苦しんでいたS国で活動していたNPOがいた。忠則の記憶が蘇る。確かに一人だけ、国境なき医師団として活躍していた日本人が一人いた。

「ば、馬鹿な、あの時のあいつはお——」

取り出したベレッタM92Sを撃つ。威嚇射撃、弾はそれで壁にめり込む。

「ボクはあの日のことを忘れたことはない。報いは受けてもらう」

銃口を忠則に向ける。

「ま、待ってくれ、それじゃ、悪いのは忠則じゃないか、私は取引に来ただけ、関係ない」

今度は慌てふためくイーニースにも銃口を向ける。

「あんたがS国に武器を流した。ただ同然で貧困層に武器を与え、クーデターを起こすように唆し、国家には高値で武器を売りつけ、大儲け。あんたも同罪だよ」

イーニースも自らの犯した悪事をばらされた。腰を抜かしたように、その場にへたれ込んだ。

「あの、私は……」

恐る恐る不二子は両手を上げて聞いてみる。顔が自分は関係ないよと、語っていた。

「悪いけど、最後まで、付き合って貰うよ」

よしんば逃がしてもらえると、考えていたが、それは甘い考え。

克巳は美人には違いないが、不二子は、妙な違和感を感じていた。

「それで、ルパン。おめおめと逃げてきたのか？」

呆れたように言う、次元大介。

「仕方ないでしょ、あんなターミネーター（炎輝）1人でも、厄介なのに、ライフル連中まで出てきたんだぜ。逃げるしかないでしょ」

ルパン3世は青いオーダースーツに袖を通す。

「で、五右工門。そっちの様子は？」

ドアの前で外の様子を探っている五右工門にルパン3世は声を掛けた。

「こちらの見張りは少ないでござる」

五右工門の指摘通り、廊下をうろついている見張りは一人。手にはライフルを持っているが。

見張りの大半は1等船室に行き、2等船室や3等船室の見張りは薄い。

「シージャックか……。ほんと、毎度毎度、トラブルが起こるな」

いつでも使えるように愛用のミス&ウエツソンM19 コンバット マグナムの具合を確かめる。

「で、ルパン、奴らの目的はなんと、考えておる？」

質問しながらも、五右工門は外の気配を探るのを怠らない。

「そりゃ、1等船室の客を人質に取ってんだから、十中八九、身代金でしょ。ただ、『始皇帝の宝玉』も目当ての品のようだけどき」

修学旅行に来ていた赤間学園の生徒たちは運悪く事件に巻き込まれたのではないと、ルパン3世は確信している。連中は生徒たちを狙って、シージャックを仕掛けてきた。お坊ちやま、お嬢様学校の赤間学園の生徒たち。一人一人の親から、身代金を取ればかなりの額になるはず。

「で、ルパン、どうする。このまま、黙って、ここに籠っているのか？」

不敵な微笑みを浮かべる次元大介。付き合いの長い彼は、ルパン3世がなんて答えるのか分かっていて、聞いてみた。

「もちろん、取り返すさ。怪盗アルセーヌ・ルパンの孫が得物を横取りされたんだぜ。黙ってるわけないじゃん。それに人質になっている

不二子ちゃんを助けないと」

次元大介と五右工門は、結局、それか！ 声に出すことなく、突っ込む。

1等船室の乗客たちはホールに集められた。銭形警部もいるが、連携を組まれたらまずいということで、警備隊はばらけて監禁されている。

監禁とは言っても、警備隊が武器を取り上げられているだけで、拘束されてはいない。

銭形警部はこの犯人たちの目当ては金だけで、他者に危害を加える気はない。そのことに気が付く。

(やはり、本官の勘感の間違つてはいなかったようだ)

銭形警部のような修羅場の経験者以外の監禁された船客たちは、犯人グループが自分たちを傷付けるつもりはないとは分からない。皆にしてみれば、テロリスト以外の何者でもないのだから。

ホールを徘徊しながら、見張りを続ける犯人たち。

「あなたが、リーダーですね」

犯人グループの態度から、そう判断し、克己に話しかける秋穂。

克己の方は下調べを十分に行っているので、彼女が忠則の娘と言うことは知っている。

「何か？」

娘だからといって、克己は秋穂を恨みの対象とは考えていない。悪いのは、あくまで忠則、子供には関係がない。生徒たちは親から金を引き出す、それだけの相手。

「あなた方の目的は何なのです。おっしゃってくださいませんか？」

「金」

質問に対し、即決的確な答えを与える。

「やっぱりそうなのですね。金が欲しいのなら、こんなことしなくても、手に入れる方法はいくらでもあるでしょう。恥ずかしいとは思いませんこと？」

挑発じみた秋穂の発言に周囲の者は青ざめる。1等船室の客たちは、映画やドラマではこんな状況を何度も見ている。

そして、こんな発言をされた後、犯人は逆上して人質を殺したりする。遼や七美も焦りの色が浮かぶ。

笑い出す克巳。これもフィクションの悪役のお決まり。この後、ズトンがパターン。両手を合わせて神に祈るものも、ちらほら、出てくる。

「お嬢さん、飢えを訴えて泣く、子供を見たことがあるかい？ TVなんかではなく生でね」

秋穂は言葉に詰まる。彼女は生どころかTV、写真ですら、飢えて泣く子供など見たことはない。どう反論していいか、何もが浮かんでこないのだ。

「泣く力があるだけでしたよ」

思わず、小さな声で呟く来人。そんな小さな声を克巳の耳は捕えた。

「最初、見たとき、お前もお坊ちゃん匂いがした。だが、お前はただのお坊ちゃんじゃないようだ。少なくとも、ボクと同じものを見たな」

無言の来人。遠い過去、ロックランドで見た光景。あの町では飢えを訴え、泣く子供の他。泣くことも動くこともできないほど、衰弱したものが、あちらこちらにいた。

そして、銭形警部も察した。ルパン3世を追って世界を飛び回っている銭形警部も、紛争地域や貧困層を何度も見てきた経験がある。

一方、別の場所で炎輝は手にした『始皇帝の宝玉』を眺めていた。

アヘン戦争の時、イギリス軍人に奪われた『始皇帝の宝玉』 祖国に帰するのが先祖の悲願だった。その悲願は父に付き継がれ、そして、今、炎輝は、その悲願を果たした。炎輝の胸中に、感嘆が沸き上がる。

「後は兵馬俑に届ける。使命、果たせる……」

突如、肉を刺される音と共に、背中から腹にかけて激痛が走る。

振り返ってみれば、いつの間にか背後に立っていたモンタギューが

ナイフで背中を貫いていた。使命を果たしたことで気が緩んでいた。そして、モンタギューも気配を悟らせないように、音も立てず忍び寄ってきていたのだ。

「キヒヤシャシャシャ」

いかにも楽しそうに笑う。ナイフを振り上げ、止めを刺そうとしたが、事態に気が付いた部下たちが、駆けつけてきた。

「キヒヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

奇声を上げると、『始皇帝の宝玉』を奪い。部下たちに飛びかかっていき、何人かを切り裂きながら、逃げていく。人を切り裂くたびにモンタギューは歓喜の表情を浮かべてゆく。

部下たちはモンタギューを追うよりも、炎輝を助けることを選ぶ。

膝を付く炎輝の元に集まる部下たち。

「早く、克巳さんを呼んできてくれ！」

炎輝を見た部下の悲痛な思いのこもった指示。

指示を受けなくとも、部下は克巳を呼びに行くつもり。

部下たちは応急処置を行おうとする。

「俺のことより、先に部下たちを……」

第3章 シップ・オブ・ザ・デット

突然、VIPルームのドアが開くと、モンタギューが飛び込んできて、忠則、不二子、イーニアスを監視していたシージャックたちに襲い掛かった。

銃器で武装していたものの、いきなりの奇襲に対応が遅れ、あっさり、全滅。

モンタギューは、いつも、無表情だが、今は恍惚とした微笑みが浮き上がっていた。

返り血を浴びた執事服を気にもせず、イーニアスの前に行くと、片膝をついて『始皇帝の宝玉』を差し出す。

「取り返してきたのか、良くやった」

己の執事を褒めるイーニアス。受け取った『始皇帝の宝玉』を忠則に渡す。

意外そうな顔をする不二子。

「あっさり、渡したのを意外に思うかい。ルパンに罪を被せてしまえば、お金と『始皇帝の宝玉』の両方が手に入るのって？」

慌てて、否定する、でも凶星。不二子なら、このような場合、言われた通りにしていた。

「善人か悪人かと問われれば、間違いなく、私は後者だ。だが、それでも、ポリシーは持っているつもりだよ。取引相手は裏切らない、それが私のルール」

裏の世界でも、商売には信頼は必要と考えているイーニアス。

「モンタギュー、ルパン3世の首を持ってきてくれ、邪魔するならば、何人殺しても構わない。私に恥をかかしたんだ、それぐらいの仕返しはしないと、気が済まない」

命令を受けたモンタギューは恍惚の表情のまま、VIPルームを出ていく。

モンタギューの笑みに不二子は、少々、不安を覚えたが、ルパン3世なら、まあ、大丈夫だろうと、不安を頭の隅に追いやる。

「イーニアス、徐福を知っているかね」

『始皇帝の宝玉』を眺めながら、忠則はいきなり質問。

「始皇帝に命じられて、不老不死の妙薬を探していた男だろ。私は詐欺師と考えている。不老不死の妙薬を探すと言って、始皇帝から金を騙し取ったとね」

質問に対する答えと、自分の見解を述べる。

「その徐福だが、日本に来たと言う伝説がある」

日本の至る所に徐福の来日伝説が残っている。不老不死の妙薬の原材料のある蓬莱山は、富士山との説もあり。

「ハッ、そんなのは、ただの眉唾物の珍説じゃないのか？」

徐福来日伝説を鼻で笑うイーニアス。

「日本へ来た徐福と親交があったのがオレのご先祖でね。その時、いろいろな知識を教わり、家伝書として子孫に伝えられた。そこに、この『始皇帝の宝玉』の記述もあったのだよ」

その時、『始皇帝の宝玉』を眺めながら、浮かべた忠則の笑みに、不二子はゾツとした。さっきのモンタギューの笑み以上の狂気が、そこにあつたのだ。

「オレはのガキの頃から、夢中になって家伝書を読みふけた。そこに『始皇帝の宝玉』の使い方も記してあったんだよ」

「使い方？ コレクション以外、宝石に使い方があるのかい」

宝石はコレクションして、愛でるか、売るか。忠則の狂気の笑みはそのどちらでもないことを示す。

「イーニアス、君に特別に見せてあげよう。軀よ、起き上がれ！」

『始皇帝の宝玉』が闇色の輝きを放つ。すると、モンタギューに殺されたシージャックの遺体が、のっそりと起き上がったのである。生き返ったのではない、顔色は悪く、目も濁っていて、明らかに遺体のまま。動く死体、ゾンビ。

驚くイーニアス。不二子も驚き、声さえ、出せない。不二子自身、宇宙人やネツシーなど奇怪なものを何度も見たが、ゾンビなんてものは見たこともない。

「な、な、なんなんだこれは！」

顔を真っ青にして、イーニアスは恐怖に慄く。常識をかけ離れた状

況。

「これには、もう一つ、使い方があってね。しっかりと見たまえ！」

『始皇帝の宝玉』をイーニアスに向ける。

「喰らえ、宝玉よ」

再び『始皇帝の宝玉』は闇色の光を放つ。

突然、うめき声を漏らし、心臓を抑え、イーニアスは崩れ落ちる。

「このように命を奪うことが出来る。分かったかい、イーニアス？」

一旦、倒れたイーニアスは起き上がる。顔には精気はなく、確かめるまでもない、ゾンビ。よろよろと動きながら、ポケットの中にあつた黒いカードを忠則に渡す。

「死者をゾンビに変え、生者の命を奪う。これが『始皇帝の宝玉』の力だよ。峰不二子君。そして、こいつには更なる力もある」

語りながら黒いカードを胸ポケットに入れた。

さしもの不二子も恐怖を感じ、たじろぐ。後、数歩、下がれば、ゾンビに当たる。

「気を付けたまえ、ゾンビに噛まれればゾンビになってしまうぞ」

慌てて、不二子はゾンビから距離を取った。

「さあ、行け、ゾンビ共、命を思う存分、刈り取ってこい！」

天高く『始皇帝の宝玉』を掲げ、けたたましく笑う。

命令を受けたゾンビたちはVIPルームを出て、のそのそ、廊下を進んでいく。

こいつは外道中の外道だ。不二子は確信。口に出したら、自分も命を奪われる恐れがあるので、内心だけで止めておいた。

呼ばれて飛んできた克巳は炎輝（イエンフワイ）の背中傷を見て、呆れ返った。

「普通なら、絶対安静の重傷だ、普通ならな。だが、お前の体はそんな傷を軽傷にしまっている」

一応、傷を縫い、包帯をしっかりと巻いて置く。

それを聞いた炎輝の部下たちは、ほっと胸を撫で下ろす。

「軟な体ではない。鍛えている、ちゃんと」

「一体、どんな鍛え方をやったら、こんなにも頑丈になるんだ。聞いた
いよ」

鋭いナイフで背中から腹を貫かれているのに、軽傷してしまった鉄
の塊のような体。本当にどんな鍛え方をやったら、こうなるのか。

部屋の外で悲鳴が起こり、何やら騒がしくなる。

「なんだ？」

乗客たちに何かあったのかと、克巳が入口の方を向いた時、ドアを
突き破ってゾンビたちが乱入してきた。

ホールに監禁されている1等船室の乗客たち、プラス来人。

先ほど、克巳が呼ばれて、出ていったきり、あまり変化はない。

広く大きいホール。豪華絢爛に作られ、天井にはシャンデリア、
艶々の床。舞台もあり、今日の夕方には有名な歌手グループが歌うこ
とになっていた。セットもちゃんと整っていたが、無駄になってし
まったようだ。

そんな豪華絢爛なホールの内装も、監禁されている乗客たちを癒せ
ることは出来ず、あちらこちらからすすり泣く声が聞こえている。

「ねえ、来人さん。リーダーが、留守の今がチャンスじゃありませんこ
と」

小声で秋穂は囁いた。今なら、見張りをやっつけて、皆を開放する
チャンスではないかと。

銭形警部も、そんなことを考えていて、当たりの様子をうかがって
いる。

でも来人は左右に頭を振る。相手にこちらを傷付ける意思は感じ
られないなら、下手に暴れる必要はない。

乗客たちは、こんな時、元・アメリカ海軍特殊部隊のコックがいな
いのか、乗客の中に世界一ついてない警察官はいないのかと思ったり
していた。

ただ、監禁されている乗客の中に修羅場の経験者が2名いることは
誰も知らないこと。

その2人が真っ先に異変に気が付く。

手袋に隠された右手の疼き、ホールの外から感じる不気味な気配。辺りを見回す来人。舞台の上に置かれたマイクスタンドに目を止めた。

銭形警部も気配に気が付き、ゆっくり立ち上がる。

「何をしている」

ライフルを構えた見張りが銭形警部に近づこうとした、その時、大きな音を立てて、ホールのドアが開いた。

船客たちは一斉に、音の聞こえてきたドアの方角に顔を向けた。雪崩込んで来るものたち。青白い肌に瞳孔の開いた生気のない瞳。生きている気配すら感じさせないのに動いている。

たちまち、パニックと恐怖が走り抜け、周囲を支配してゆく。

逃げ惑おうとする船客の中から、真つ先に飛び出した銭形警部。襲いかかってきたゾンビを捕まえると、投げ飛ばして、床に叩き付け、鉄拳と手刀でゾンビ共を倒していく。

舞台に飛び乗った来人はマイクスタンドのマイクを取って、床に置き、脚部を外す。

船客たちを襲おうとするゾンビたちを銭形警部は投げ技と鉄拳制裁で倒していく。

「何だとー」

倒されたゾンビたちが、のっそりと起き上がった。全くダメージを受けておらず、のろのろとした動きながら、銭形警部を取り囲む。

マイクスタンドを片手に持った来人が囲いのど真ん中に飛び込み、目にもとまらぬ速さのマイクスタンドさばきで、ゾンビの頭を攻撃。頭を打たれ、倒れたゾンビは、ピクリとも動かなくなり、二度と起き上がることはなかった。

「こいつらの弱点は頭だ。そこ以外、攻撃しても意味はない」

「それでは、まるで、ゾンビではないか」

身に着けた武術の構えを解くことなく、襲いかかってこようとするゾンビたちを警戒しながら、ぼやく。

「その通りだよ、こいつらはゾンビだ。命を抜き取られている」

始めは何を言っておるのかと思いはした銭形警部。でも、襲ってきて

た相手の目や肌色は死者と同じもの。格闘時に触れたときも体温も呼吸も感じられなかった。何より、このような状況下で、来人がウソやを吐く奴ではないことを銭形警部は理解している。

「ルパンにシージャック。続いてゾンビとは、一体、どうなっておるのだ」

カイ師匠に師事し、過酷な実戦で鍛えに鍛え上げた棒術で、来人はゾンビを撃破していく。一方、素手の銭形警部は、なんとか、ゾンビの攻撃は凄いでいるものの、決定的なダメージを与えることが出来ず、ジリ貧状態。

隙について、ゾンビ一体が銭形警部の脇をすり抜けて、船客に向かう。すぐに取り押さえようとしたものの、他のゾンビの群れに阻まれ、出来ない。来人も同じく、助けに行けない。

今にも船客に襲いかかろうとする。船客たちの上げた悲鳴に銃声が重なり、ゾンビの頭が撃ち抜かれる。

ホールの入り口にベレッタM92Sを構えた克巳が立っていた。その後ろには青龍刀を持つ炎輝。そして、その部下たち。

克巳たちは襲い掛かってきたゾンビを帰り討ちにして、ホールへ駆けつけてきた。

無言で克巳は、銭形警部から奪い取ったコルト1911 A1ガバメントを投げて、返す。

受け取った銭形警部は迷うことなく、ゾンビりの脳天を撃つ。

ホールにやってきた克巳たちは部下に命じ、これ以上、ゾンビが入ってこれないように、全部のドアを閉めさせた。

マイクスタンドで戦う来人。コルト1911 A1ガバメントで戦う銭形警部。ベレッタM92Sで戦う克巳。青龍刀で戦う炎輝。1名、武器ではないもので戦っているが、ホールに入り込んだゾンビは、どんどん、駆逐されていった。

ホールに入り込んだゾンビを全て駆逐したのち、克巳の部下たちが船客たちの目に届かない舞台裏などに動かなくなったゾンビを運び込む。

誰にも気付かれないように、そっと、秋穂は元、シージャックのゾ

ンビの懐からコルト M1908を抜いておく。

数分で遺体の片付けが終わった。

ホールの中央に一塊になって、船客たちは震えている。前以上に泣いているものもいる。

楽しい思い出の船旅になるはずだった船旅。シージャックも恐ろしいのに、想像を越えたゾンビの来襲。これが映画、せめて夢であってほしいと、両手を合わせて心の中で願う。でも、それは叶わない。「ボクは、これから、2等船室、3等船室の客たちを助けに行く。半分は残って、ここにいる船客たちを守れ」

部下たちに命令。それを聞いた遼は、

「なんで、シージャックのあんたらが助けに行くんだ」

尋ねる。七美も同じ疑問を持っている。

「ボクたちの目的は金、命じゃない。それにボクたちは戦う術を知り、武器も持っている。助けられる命があれば助けるのは当然だろ」

それが克巳の答え。炎輝や部下たちも頷き、同意見という意味表示。

「ならば、本官も同行させてもらおうぞ」

胡坐をかいて座っていた銭形警部が立ち上がる。彼も戦う術も武器も持っている。

「本来、お前たちを逮捕するのが本官の仕事だが、今は人命救助の方が優先だ」

それを聞いた克巳、炎輝、部下たちは面白そうに笑顔を作る。

「だが、事態が収束すれば、逮捕する」

本来の職務も忘れてはいない。克巳たちも、そう簡単に捕まらないうざと、表情で告げる。

「僕も行くよ」

マイクスタンド片手に来人は立ち上がる。

「子供は駄目だ」

即答で克巳は断るが、その肩を炎輝が叩く。

「あいつは強い、本物。連れていくべき」

そう言われた克巳は、僅かな時間、考える。克巳も来人が生半可な人生を歩んでいないことは感じ取っていた。さっきのゾンビの戦いも、銃器ではない、武器でもないはずのマイクスタンドを使って戦い。数多くのゾンビを撃破していた。

間違いなく、その実力は本物。

「分かった」

来人、銭形警部、克巳、炎輝たちのやり取りを見ていた船員の一人が生唾を飲む込む。彼はこのホールの責任者の立場にある。ギユツと拳を握りしめ、勢いよく、立ち上がる。それは、今した決心を自身自身から逃がさないため。

「わ、私も行きます。戦力にはならないですが、船内の案内は出来ません。船内に詳しいものも必要でしょう」

少し震えている。ホール責任者は怖がっている。でも、それを上回る決意を持っていた、乗客を守るのは自分の責任。これ以上の犠牲者を出してはいけない。

「来い」

それだけを責任者に告げた。

来人、銭形警部、克巳、炎輝、部下の半分。最後に責任者。皆、ドアに向かう。

「ボクたちが出て行ったら、しっかりと鍵をかけておけ。ボクたちが戻ってくるときは、最初に3回のノック。次に2回のノック。最後に3回のノック。その時は鍵を開けてくれ、それ以外は、何があっても開けるな」

そう命じて、ホールを出発。

出ていった後、残留して、船客たちを守る任を与えられた部下たちは、命令通りにホールのドアを閉め、しっかりと鍵をかける。

先頭を進む克巳に、銭形警部は話しかけた。

「本官から見ても、貴殿らは根っからの悪党ではない。なのに、どうして、シージャックなどをやったのだ？」

それが引つかかっている。銭形警部はいろんな悪党を見てきた。

心の奥の奥まで腐れ切った外道も何人も見てきた。でも克巳や炎輝たちは、外道でもなく、小悪党でもない。なにか目的を持っているのではないかと、感じていた。

「S国を知っているかい」

頷く銭形警部。そこで克巳は忠則が義援金を横領した話を聞かせた。

「なんと、赤間忠則がそんなことをやっておったのか！」

「逮捕しようとしても無駄だよ、あいつは狡猾だ。何の証拠も残していない。最も、証拠があれば、こんな真似はしないけどね」

全く、その通りである。

「ボクは赤間学園の生徒たちの親から取った身代金をS国の貧困層に流すつもりさ。それと、同時に忠則に報いを受けさせる」

銭形警部は唸る。克巳も気持ちは分かる、S国の貧困層を救いたいと言う気持ち、義援金を横領し、内乱を起こした忠則に対する憤りも理解できる。話を聞いただけの銭形警部も忠則に手錠をかけてやりたいと、思ったほどだ。手段は承認は出来ないが。

「私の目的は別。イギリスに奪われた『始皇帝の宝玉』を取り返し、兵馬備へ届ける。祖父の代からの悲願」

炎輝も自らの目的を話す。

「なるほど、それで意気投合したのだな」

頷く、克巳と炎輝と部下たち。部下たちは克巳が紛争地域で知り合ったものや、軍隊にいた炎輝の同僚たち。武器もそこから調達。

『始皇帝の宝玉』のことはともかく、S国のことはインターポールの力を使えば何とかできないかと、考える銭形警部。

赤い絨毯の敷かれた豪華な客船の廊下を進み行く、忠則と不二子。今までであった船客たちを忠則は『始皇帝の宝玉』で、ことごとく、ゾンビに変えていった。

「まだ、足りないのか『始皇帝の宝玉』よ。ならば、もっと、人の命を喰らうがいい」

人間をゾンビに変え、ゾンビになったものは他者を襲い、噛まれたものもゾンビになり、ねずみ算式にゾンビは増えていく。今や、戸羽丸は地獄と化していた。

この状況を生み落した本人は、己の行為に対する罪悪感や後悔の感情は微塵も存在とておらず、喜んでさえいる。

わざと不二子は歩くスピードを悟られないように、徐々に落として、忠則との距離を広げた。

これ以上、不二子は忠則についてはいけない。そろそろ、潮時。こんな奴と一緒にいるぐらいなら、マモーと社交ダンスをする方が何十倍もましである。(オリジナルの方)

吹き抜けのテラスに来た時、チャンスと不二子は行動を起こす。

いきなり、手すりを乗り越え、3階の高さがあるにもかかわらず、飛び下りる。

驚いた忠則が振り返るが手遅れ。

落下しながら、スーツを脱ぎ捨てる。背中には予め、折り畳み式の翼を仕込んでおいた。それを開き、ハンングライターの要領で船内を飛ぶ。

ここまで、距離を取れば『始皇帝の宝玉』に命を奪われる心配はない。ふと、不二子が上を見れば、悔しそうな忠則の顔が見えた。

物陰に隠れ、廊下の様子を伺うルパン一味。廊下には、ゆらりゆらりくと動くゾンビの群れ。

「シージャックの次はゾンビかよ、トラブルって言っても限度があるだろ」

壁を背にマグナムを構える次元大介。

奪われた『始皇帝の宝玉』を取り戻そうと、船内を散策中にゾンビに遭遇。撃退しつつ、進み、今に至る。

廊下にいるゾンビの数は多い、そう簡単に突破できそうにない。

「アレに噛まれたら、ゾンビになってしまうだろうな。お約束だもんな、映画じゃさ」

のんきに言ってるのけるルパン3世。手にしている愛銃はワルサー

「俺はゾンビ(旧作、夜明けのゾンビ)や28日後…と28週後…。ゾンビランドは面白いと思ったが、映画は見るもんで、渦中に飛び込むもんじゃないだろ」

ポケットから、湿気た煙草を一本取り出し、啜る次元大介。

ライターを取り出し、煙草に火をつけようとした次元大介の肩を叩き、五右工門は壁を指さす。そこには船内全域、禁煙の標識。溜息を1回付き、煙草とライターをポケットにしまう。

このままではいつか、見つかつて、ゾンビの群れが雪崩れ込んでくる。すると、どうなるのだろう。考えるだけでおぞましい結果になるのは確実。ルパン3世と次元大介は身を震わせた。

「拙者が行くでござる」

言い終えるが早いか、廊下に飛び出す五右工門。ゾンビの群れは、一気に襲い掛かってくる。

基本的にゾンビの動きは鈍い、五右工門程の男なら、避けるのは容易い。雪崩れ込まれる前に片付ける。これが五右工門の出した答え。

避けながら、走り抜けながら、斬鉄剣を引き抜き、気合一閃。

「また、つまらぬものを斬ってしまった」

ちいんと、斬鉄剣を鞘に納める。ゾンビの群れの頭がコロんと落ちて、倒れる。

「流石、五右工門。いかす」

拍手して褒めちぎるルパン3世。

「助かったらぜ、本当に」

静かに褒める次元大介。

これで廊下を占拠していたゾンビは撃退出来た。やっと、先へと進むことができる。

しばらく、ルパンたちが廊下を進んでいると銃声が聞こえてきた。銃規制のある日本で、警官などの特定の仕事を除き、銃を持っている人は少ない。

敵か味方が分からないが、とりあえず相手を確認するため、ルパン

3世たちは音をたてないように、そつと銃声の聞こえてきた廊下の角を覗く。

そこにはブローニングM1910を撃って、ゾンビと戦う不二子の姿が。

「もう、こいつらきりがないじゃない!」

愚痴をこぼす。

「不二子ちゃん」

おなじみのセリフとともに飛び出したルパン3世。懐からワルサーを抜き、撃つ。

やれやれと言った感じで、次元大介と五右エ門も助太刀に飛び出す。

「助かったわ、ルパン」

ゾンビを片付けた後、抱きつく不二子。鼻の下を長くしてデレデレのルパン3世。そんな2人を呆れたように見る次元大介と五右エ門。

「おい、不二子。この事態、お前が原因じゃ無いだろな。どつかの傘みたいな名前の会社から盗んだウィルスをうっかり落としとか」

厳しい言い方で次元大介は質問。いつも不二子のもたらすトラブルで、自分たちは散々振り回されてきた。

「そんなもの盗んだことないわよ。いくら金になるからって、なんでも盗むわけないわ」

頬を膨らませ、否定。

「傘みたいな名前の会社。パラソルでござるか?」

一気に場の空気が変わる。五右エ門はボケたのではない、天然で言ったのだ。五右エ門はTVゲームをやったことはない。

しばらくはしらけていたが、このままではいけないと、真っ先に気を取り戻した不二子。

「私じゃないわ。やったのは忠則よ」

VIPルームで何が起こったのか話し始める。

「人の命を奪い取り、ゾンビに変える宝石。とんでもねもんだな。怖

「いったらありやしねえ」

不二子の話聞き終えたルパン3世と次元大介と五右工門。口では怖いと言いながらも、ルパン3世に恐れている様子は微塵もない。むしろ、やる気、満々。

「おい、不二子。最初っから『始皇帝の宝玉』がそんなもんと知っていて、俺たちに狙わせたのか？」

本来、人の命を奪い、ゾンビに変える宝石なんてものはにわかには信じられるものではない。しかし、ルパン一味は、今し方、そのゾンビと戦っていた。

それを実行した忠則は外道以外の何者でもない。『始皇帝の宝玉』の正体を知っていて盗ませようとしたなら、不二子も同罪である。

「冗談じゃないわ、私だって、あんなものだど、知っていたら狙ったりしないわよ」

心外だわと、ワザとらしくむくれる不二子。それを慰めるルパン3世。

「して、この先、どうする」

尋ねる五右工門。ちゃんと救命艇はある。それを使えば戸羽丸から脱出できる。ルパン3世たちなら簡単な仕事。

「ここで逃げたら、ルパン3世の名が廃るつてもんだろ。ちゃっかりと借りは返さないとな」

不敵に微笑む。
「だな」

次元大介も微笑む。泥棒でもカタギを殺しまくる外道は許せない。

五右工門も同意を示そうとした瞬間、気が付く。

「伏せろ、ルパン！」

いきなり、斬鉄剣を抜いた。とっさにルパン3世は身をかがめた。

金属と金属がぶつかり合う音。斬鉄剣がルパン3世、目がけて振り下ろされた鋭いナイフを受け止めていた。

びっくりして飛びのく、同時に振り返り、襲撃者の姿を確かめる。

そこにいたのはイーニアスの執事、モンタギュー。ルパン3世でさえ、ここまで接近されても気配を感じさせなかった。実はモンタ

ギューは執事に転職する以前の職業はプロの暗殺者。血を流しすぎたために血を見ることに快感を覚えるようになってしまった。

「キヒヤシヤシヤシヤ」

奇声を上げながら、後ろへ飛んで距離を取る。

迷うことなく、ルパン3世はワルサーをぶっ放す。

きん、ナイフで弾丸を弾く。続いて不二子もブローニングを撃つが、モンタギューの左手の袖から飛び出してきたナイフに弾かれる。

「どいてろ、ルパン」

マグナムを撃つ次元大介。ダーティハリイの時代は世界最強と言われただけあり、マグナムから放たれた弾丸は弾けず、ナイフを二枚重ねにして、何とか受け止める。それでも衝撃は殺せず、真後ろへ吹っ飛ぶ。

倒れたところへ主人であるイーニアスが現れた。一瞬の気の緩み命取り、モンタギューは主人に噛みつかれてしまう。

悲鳴を上げるモンタギューをしり目にルパン3世はワルサーを撃ち、イーニアスゾンビのこめかみに穴を穿つ。

「ルパンよ、俺、嫌な予感がするんだが」

倒れたイーニアスではなく、モンタギューに視線を合わせて、次元大介はマグナムを構える。

「私もよ」

不二子もブローニングを構えた。

ゆっくりと起き上がるモンタギュー。元々、青白かった肌はさらに青白くなり、瞳孔が開く、意志の欠片も感じさせない。

確かめるまでもなく、ゾンビ。

両手のナイフを落とすと、物凄いスピードで噛みつきこうと突進。

ルパン3世と不二子、次元大介と五右衛門。それぞれ、左右に分かれて、突進を躲す。

「ち、ちよつと、待て。ゾンビは鈍いんじゃないのか!」

ルパン3世が叫ぶ。

「リメイク版のドーン・オブ・ザ・デットや28日後…や28週後…のゾンビは、やたらと、早いんだ」

親切に次元大介が教えてあげる。

突進を躲されたモンタギューは床を蹴って、襲い掛かる。その攻撃もルパン3世たちは避ける。

今度は壁を蹴って、突進。

広い豪華客船の廊下の壁や床を蹴って、そのたびに加速しながら、襲い掛かってくるモンタギュー。避けるのが精いっぱい、ルパン3世たちは攻撃する暇がない。

右へ左へ、何とか攻撃を避けていく。次元大介は帽子が落ちないように片手で抑えながら、攻撃をやり過ごす。

どんどんと追い詰められていく、ルパン3世たち。不二子が躓き、こける。

こけた不二子をにモンタギューが噛みつこうと、限界まで口を広げ、襲い掛かる。

「不二子ー」

ルパン3世は不二子に追い被さった。

「ルパン！」

次元大介と五右エ門が助けうとするが、間に合いそうにない。

不二子を守ろうするルパン3世に噛みつこうとした時、モンタギューにの背中に投げつけられたマイクスタンドが命中。

強烈なマイクスタンドの一撃でモンタギューの体がルパン3世と不二子から引き離された。

このチャンスを炎輝は見逃さない。一気に間合いを詰め、青龍刀を引き抜き、上半身と下半身を両断。

下半身は数歩歩くと、壁に当たって、倒れ、上半身はジタバタと蠢いていたが、次元大介が頭に弾丸を叩きこむと、動きは止まった。

「ありがとう、助けてくれたのねルパン♡」

自分を庇ってくれたルパン3世に素直に気持ちでお礼。いくら不二子でもゾンビにはなりたくない。

「不二子ちゃんを助けるのは当然だろ。それより、お礼のキス〜」
キスをしようとしたルパン3世。

「調子に乗らないー」

その頬に平手打ち。

「助かったでござる」

廊下の向こうからやってきた来人、克巳、炎輝、その部下に五右工門はお辞儀。

部下たちの後ろに銭形警部もいる。

「銭形よ、どうしたんだ。シージャックに転職でもしたのか？」

ワザとらしく嫌味ぽいことを次元大介は言ってみせた。

「場合が場合だからな。この事態が収まるまで、協力することにしたのだ。無論、ルパン、お前たちともだ。だが、事態が解決した後は……」

ここで、一旦、咳払い。

「逮捕だああああああ、ルパアアアアアアアアン！」

来人たちは2等船室、3等船室の船客たちを助けるために船内を進んでいた。見れば後ろには助けた船客たちが何人も付いてきている。皆、憔悴しているが、希望を失ってはいない。

この者たち全員がカギをかけて船室に立て籠っていた。その1人を救出。中には恐怖のあまり、外に出るのを拒んだものもいたが、根気よく説得し、出てきてもらったのである。

犯罪者を逮捕するのが警官の仕事。ルパン一味を捕まえるのが銭形警部の悲願。しかし、人命救助のためなら、ルパン一味やシージャックたちと協力するのを迷わない。銭形警部がそんな男であることをルパン3世たちは知っている。

「克巳とか申したな。お主」

ふと、先頭を歩く克巳に五右工門は声を掛けた。

「なんだい？」

返事しながらも歩くのはやめない。

「何故、女の格好をしている。男であろう、お主」

ここでルパン3世と次元大介の足が止まった。2人とも克巳を女と思っていた。不二子は克巳を見た時に感じた違和感の正体をようやく知った。

以前、五右工門は白浪五人衆と戦った時に、そんな奴に騙されたことがある。そのため、そんな相手を何となく、分かるようになった。「守れなかった恋人に対する、戒めでこんな恰好をしているのさ」
S国で奪われてしまった命。遺品の女物のペンダントを常に身につけている克巳。

「男の娘かよ、最近、流行りだからってな」

何とも言えない顔で次元大介は自然に言葉を漏らす。ルパン3世は見破れなかったことを悔しく思い、ふてくされていた。ただ、克巳とは初対面だし、あの状況下では仕方がないこと。

福引で当てた自分の部屋の前に来た来人。

「ちよつと、待ってて」

断つてから、カードキーを使い、部屋に入ると、壁に立てかけていたロッドケースから、釣竿に紛れて隠していた、一本の黒い棍を取り出す。

「ほう」

それを見た五右工門は思わず、声を漏らしてしまう。

「かなりの業物だな。刀でたとえるなら、名刀でござる」

斬鉄剣を持つているだけあり、武器に関してはかなりの目利き。

「これはね、天牙棍って言って、名工が鍛えたものなんだ」

大師匠メース。4人の弟子を持つ名工中の名工。彼の手によって鍛えられたのが、この天牙棍。

ようやく来人は自身の使い慣れた武器を手にすることが出来た。

元々、来人は強い、自らの愛用の武器を手にしたから、さらに強い。船客の探索、救出の最中、何度もゾンビに襲われたが、ことごとく、片付けた。

ルパン3世、次元大介、五右工門、不二子、銭形警部、炎輝、克巳、部下たちの活躍も素晴らしく。助けた船客を含めて、怪我人1人もいない。

「あなたたちのおかげで、多くのお客様を助けることが出来ました。

ありがとうございます」

正直にホールの責任者は感謝。

「あんたの案内がなかったら、こんなにもスムーズに救出はできなかった」

ホール責任者にも克巳は感謝の言葉を贈る。

ここに来るまで、来人たちとルパン3世たちお互いの知っている情報を交換した。

人間をゾンビに変える『始皇帝の宝玉』それが、ゾンビを生み出した原因であることをみんな知った。

「うむ、忠則と言うやつは何がしたいのだ？　こんな外道な真似をして、何を企んでいる」

銭形警部の言葉の中には憤りが隠すことなく入っていた。それはここにいるもの全員の共通の思い。

「なんだか、他の使い方もあるみたいのこと言っていたわ」

不二子は忠則の物言いから、それを察していた。

「やれやれ、人をゾンビに変えるだけでも、恐ろしいのに、まだ、他に使い方があるのか。この船のオーナーは『始皇帝の宝玉』を使って、何をやらかすつもりだ。世界征服かよ」

本当にやれやれと言う風に次元大介は話す。内心、忠則に一発、ぶち込まないと、気が収まらないと思っっている。

「なあ、来人君よ」

歩きながら、ずっと、何かを考えていたルパン3世は声を掛けた。

無言で来人はルパン3世に振り向く。

「なんか、心当たりあるんじゃないか？　『始皇帝の宝玉』の正体や、忠則の目的によ？」

見た目は子供に過ぎないのに、やたらと、腕が立つ。それに率先して、前線で戦おうとする。そこに何か使命感のようなものを感じたルパン3世は、そう考えた。

頷く来人。

「でも、話せない。今は……」

この状況、今、この時、戸羽丸に漂っているオーラ。これは、身近

な感じに似ている。無意識に自分の右手を視線を移した。

来人自身の目で『始皇帝の宝玉』を見れば、今、心の中で渦巻いている疑いが、確信に変わるだろう。

第4章 『ソウルイーター』

2等船室と3等船室の先客の救出は、とんとん拍子に進んでいった。ホール責任者の案内と来人たちの連携が上手くいったから。

何度もゾンビの襲撃に遭遇したものの、そのつど来人、ルパン3世、次元大介、五右衛門、不二子、銭形警部、克巳、炎輝（イエンフウイ）と部下たちの活躍で、ことごとく退けてきた。

まれにモンタギューのように、素早いものや怪力を持つ変異種のようなゾンビもいたが、ものともせず撃破、誰一人欠けることなく進む。

「人数も多くなってきたことだし、一旦、ホールに戻ろう」

克巳の言う通り、助け出した船客たちは、そこそこの人数になっていた。まだ、生存者がいる可能性はあるが、この数ではいざというとき、支障をきたす可能性が無いわけではない。一旦、ホールに戻るのが得策。

ホールを目指し、廊下を進む。廊下でも豪華客船だけあり、見事な装飾を施していて、幾分か、船客たちの心を和ませた。

このまま行けば何事も起こらず、ホールに辿り着けるはず。何もおこなければ……。

「ああっ！」

突然、不二子が声を上げ、前方を指す。そこには大勢のゾンビを引き連れた忠則の姿が。

「チッ」

来人たちに気が付いた忠則は舌打ちして、『始皇帝の宝玉』を向けようとした。そうはさせるかと、ルパン3世と次元大介が発砲。

2体のゾンビを盾にして、弾丸をやり過ごす。

「クソッ」

不利だと判断したようで、半分残し、もう半分のゾンビを引き付けて、忠則逃亡。

逃げた方向からして、忠則が目指しているのはホール。手には『始

皇帝の宝玉』がある。何をやろうとしているのかは考えるまでもない。

皆、後を追おうとしたが、行く手をゾンビに防がれて、先へ進むことが出来ない。

「ここは僕が食い止めるー！」

天牙棍を片手にゾンビの群れに突入、ゾンビを蹴散らせる。

克巳もベレッタM92Sを撃ち、来人をサポート。

「すまん」

一言だけ残し、炎輝は襲いかかってくるゾンビを青龍刀でけん制しながら、忠則を追いかける。部下たちも続く。

「私に『始皇帝の宝玉』を向けたわね。許さないからー！」

ゾンビに変えようとしたことに憤りを覚え、不二子も追いかける。

そんな不二子を助けるためにルパン3世が続いた。そのルパン3世を援護するべく次元大介が追う。

ただ五右工門は追わなかった。

「拙者、助太刀するでござる」

斬鉄剣を抜き、ゾンビに向かった。

五右工門は武人である、そして来人を真の武人と認めた。武人が武人を助太刀するのに、理由は必要ない。

また、天牙棍は業物であることもさることながら、ちゃんと、手入れもされていた。そんなところも五右工門は共感を覚えた。

「なら、本官も残らせてもらう」

銭形警部も残り、ゾンビを撃つ。女(実は克巳は男の娘だったが)子供を守るのは警察官の義務。彼も残留を選択。

1等船室の客たちが集められているホール。いまや、ここはゾンビから身を守るためのシェルター。

来人たちが出て行って、結構な時間が過ぎた。皆、あまり、表には出していないが、不安な思いを抱いていた。もし表に出してしまったら、決壊した堤防のように、一気に恐怖が押し寄せてくるかもしれない。

七美もそんな一人、小刻みに震えている。本来は誰にも気づかれな
いほどのものだつた。でも遼は気が付いた。

「大丈夫だよ、来人は強いじゃないか、皆、無事で帰ってくるよ。ゾン
ビを根絶やしにしてさ」

ぎこちない笑顔。遼も怖いのだが、それでも、精いっぱい、笑顔を
作った。そんな笑顔でも、七美に勇気を与えるのには十分。

「そうだね」

両者とも意識はしていなかった。でも遼と七美は肩を寄せる。

仲良く寄り添う遼と七美。そんな2人を無言で秋穂は見つめてい
た。

ドンドンドンドン！ 激しいノックの音が鳴り響き、船客たちは、
皆、心臓に良くないことになった。幸いなのはそれだけですんだこ
と。

「誰だ」

克巳の部下の一人が声をかけた。ライフルを構える、警戒心を露わ
にしながら。

ホールから出ていくとき、克巳は『3回のノック。次に2回のノッ
ク。最後に3回のノック』で開けると言い、それ以外は開けるなど
言っていた。今のノックは明らかに違うもの。

「助けてくれ、開けてくれ、ゾ、ゾンビに追われているんだ！」

外から聞こえてきた切羽詰まった声に、船客たちは騒めきだす。た
だ、1人、秋穂を覗いて。

それでも開けようとはしない。このような状況下、簡単に他人を信
じてはいけないのは部下は経験を持って知っている。また、その経験
が育てた勘が危険信号を放っていた。

繰り返されるノック。助けてくれとの懇願に動こうとしない部下
に対し、船客の1人が立ち上がった。

「何しているんだ、早く開けてやれ！」

それに呼応するかのように、船客たちから、次から次へと開けてや
れの声が上がっていく。ただ、反対する声も少くない。

それでも動こうとしない部下に、痺れを切らした観客が強引にドア

を開けようとした。

「おちつけ、合図が違う」

部下はそれを阻止。

その行為が引き金になったのか、開けろと言った船客たちが一丸となって、ドアに向かう。

部下たちの手にはライフル。これはあくまで脅し用で、船客に向けて撃つつもりはない。威嚇射撃もここまで押し切られてしまったら不可能。

船客の一人が部下の制止を振り切り、ドアまで走って、カギを開けてしまう。

「もう大丈夫だ、ここにいれば安全——」

闇色の輝きが、ドアを開けた船客を包み込む。

倒れた船客は、のっそりと起き上がる。確かめるまでもない、この船客は、もう生きてはいない。

「ふん、愚民はすぐに騙される。本当に愚かなブタだ」

部下たちの制止を振り切ってまで助けようとしてくれた船客を嘲笑い、侮蔑を与えながら『始皇帝の宝玉』片手に忠則はゾンビを引き連れ、ホールに入ってくる。

「だが、そんなブタの命でも、このオレのための役に立つんだ。感謝したまえ、愚民ども、ブタは死ねええええ!!!」

ホールに残った部下たちは紛争地域にいたり、兵士として戦場で戦ったもの。修羅場では、一瞬の油断が命取りになる。そんな中で生き延びてきた部下たちは、危険が迫ると自然に体が動く。だから、全員、避けることができた。

忠則の手にある『始皇帝の宝玉』が闇色の輝きを放つ。ドアの前に集まっていた船客たち。皆、今日まで平和な社会で過ごしてきた。そのため、今、目の前で起こっていることを理解するのに、時間がかかってしまい、行動が遅れ、闇色の輝きに包まれてしまう。

倒れ、起き上がる。起き上がったときには、すでにゾンビになっていた。

この時、ホールにいる船客たちは知った。戸羽丸にゾンビが現れた

原因を、その元凶を。

蜘蛛の子を散らすように逃げていく、船客たち。遼も七美も逃げる。

皆、何とか安全な物陰に逃げ込むことに成功した。

ふと、遼と七美は、その中に秋穂が居ないことに気が付き、辺りを探してみるが見当たらない。

「まさか、逃げ遅れたのか」

不安が遼と七美を包み込む。同時に置き去りにしてしまったのではないかという後悔も。

部下たちの反応は早い。警告もなしに、ライフルを発砲。忠則はゾンビを盾にして、弾丸を防ぐ。

『始皇帝の宝玉』が、今まで以上に強く激しく輝く。その闇色の輝きを見た全員に、ある感情を引き起こさせた、それは恐怖。

命あるもの全てが逃れることのできないもの、死。純粹たる死に対する根源の恐怖。『始皇帝の宝玉』の放つ闇色の輝きは、命あるもの全てにそれを思い起こさせた。

「ついに始まったぞ。ついに始まった！」

けたたましい忠則の笑い声がホールに響き渡る。

「ギルガメッシュが望み、始皇帝が望み、多くの権力者が望み、その誰もが叶えられなかった夢をオレが叶えるんだ。愚民どもブタどもの命を喰らい、『始皇帝の宝玉』が真の力を発現する。オレは永遠の——」

一発の銃声が轟く。僅かな間、忠則も船客たちも部下たちも、思考が停止した状態になり、何が起こったのか理解できなかった。

「あれ？」

自分の胸に生じた焼けつくような痛みにも、一番、最初に忠則の思考が回復。

目の前にはコルト M1908を構える秋穂。もう一発、撃つ。

「あ、秋穂」

なぜ？ 忠則はそんな顔をしていた。

さらに一発。また一発と無言でコルトを撃ち続ける。忠則の手から『始皇帝の宝玉』が落ちた。

父親の暴挙に娘が怒って、天誅を与えた。船客たちは、そんな思いを持った。ただ、秋穂と仲の良かった遼と七美だけは違った。

秋穂の見せた表情。こんな顔、今まで2人とも見たことがない。直撃で悪意を叩きこむ忠則の下卑た笑顔とは違い。静かで、じわりじわりと染み込んでくるような邪悪な微笑み。

「さようなら、お父様」

止めの弾丸を撃ち込む。その時、秋穂が見せた目は怒りでもない、悲しみでもない、侮蔑の眼差し。

「私も家伝書を呼んだのですよ、お父様」

床に落ちた『始皇帝の宝玉』を満面の笑みを浮かべて、秋穂は拾い上げる。

「終わることのない命と不老は私が貰い受けますわ」

足止めに放たれたゾンビを倒しながら、ルパン3世、不二子、次元大介、炎輝はホールへと急ぐ。

早く行かなければ、最悪、ホールにいる全員がゾンビに変えられる。その思いで、走った。皆、鍛えているので、息切れはしない。

ホールに辿り着いたルパン3世は、死への恐怖を呼び起こす闇色の輝きを放つ『始皇帝の宝玉』を片手に笑っている秋穂の姿と、倒れ、事切れている忠則の姿を見たとき、何が起こったのか理解。

「あなたがルパン3世さんですね。お初にお目にかかります。私が赤間秋穂でございます」

見た目こそ、令嬢らしい丁寧なお辞儀をした。

「俺がルパン3世。初めましてお嬢ちゃん」

こちらにも笑顔で挨拶を返す。顔は笑顔でも、油断を微塵も見せてはいない。ルパン3世だけではない。不二子、次元大介、炎輝、全員が警戒心を全身に張り巡らせ、秋穂と対峙。

「ファンの好として、あなたにこの『始皇帝の宝玉』の真の力を教えてあげますわ」

ゆっくり、ゆっくりとルパン3世は笑顔を解く。秋穂は笑顔のまま。

「命を喰らい続け、その果てに持ち主に終わることのない生と不老の体を与える。これが『始皇帝の宝玉』の真の力よ。始皇帝が求め、手に入れなかったものを私は手に入れましたわ」

恍惚とした表情で『始皇帝の宝玉』を見つめる。闇色の輝きに照らされ、秋穂の顔が歪んで見える。

「私、老いるなんて、まっぴらごめんですわ。永遠に、この若さを保ち続けますの」

不老不死を求めたギルガメッシュや始皇帝。血には若返りの効果があると信じて、血の風呂に浸かった血まみれの伯爵夫人エリザベータ・バートリ。不老不死の薬の開発を命じたエレナ・チャウシエスク。多くの権力者が求めたもの、不老不死。

「ルパン3世さん。私のところに来ない？ こつちに来たなら、あなたにも永遠を上げるわ」

大きな、大きなため息、それもわざとらしく吐く。そんな仕草でも、どこことなく、カッコつけているのか、周囲のものに渋く感じさせる。

「限りのある命だから、スリルがあつて楽しんじゃないか。スリルの無い人生なんて、死んでるのと同じだぜ、お嬢ちゃん」

肩をすくめて見せる。これもオーバーアクション。

「それに一人に永遠の命を与えるのに、一体、何人の命を犠牲にするつてんだ。その『始皇帝の宝玉』はよ。そんなおつかないもん、捨てちまった方がお利口さんだぜ」

手当たり次第に忠則は『始皇帝の宝玉』に命を喰わせて、ようやく、真の力を発揮させた。数えきれない人の命を犠牲にして、終わることのない生と不老の体を与える。

『始皇帝の宝玉』が途轍もなく、恐ろしい物であることは明白。ここにいる、誰もが理解していること、秋穂を除いて。

「世界には価値のある命と、価値のない命があるの。価値のある命が価値の無い命を刈り取って、価値のある命のために役立てる。これで世界は正常に動くのよ。そう思わないかしら、ルパン3世さん？」

首を左右に振り、秋穂の言葉を否定するルパン3世。

「俺はそう思わない。何より、価値がある命かどうかは、他人が決め

ることじゃねえ、自分自身で決めるもんだろ」

秋穂の沈黙。ほんの僅かな間、秋穂は沈黙して、冷たく、見下すような目でルパン3世を見つめる。

「そう、とても残念だわ。あなたも価値のない命だったみたいね。ルパン3世！」

『始皇帝の宝玉』をルパン3世に向ける。

いくら、終わることのない生と不老の体を与える『始皇帝の宝玉』を持つていても、秋穂は素人である。そして、ルパン3世はプロ。ありとあらゆる危険に直面して、何度も、命の危機に合いながらも、それを蹴散らし、今日まで生き延びてきた。

秋穂が『始皇帝の宝玉』を使うことは先刻承知。すぐさま、ワルサーを撃つ。

ルパン3世はフェミニストで女性に甘い。そのためわざと弾丸を逸らせた。

それでも、闇色の輝きの軌道を変えることには成功。

それぞれの得物を手にルパン3世、次元大介、不二子、炎輝は散らばり、けん制。

部下たちもライフルを手に船客たちを取り囲み盾になる。

『始皇帝の宝玉』を使い、指示を出す。いきなり、ゾンビたちは共食いを始める。ゾンビを喰らったゾンビは、一回り、大きくなる。大きくなったゾンビたちが喰い合い、さらに大きくなる。弱いものは喰われ、強いものだけ生き残る。これを繰り返す。ゾンビの数は減っていくが、勝ち残ったゾンビは巨大化。

最後の最後まで、勝ち残ったゾンビは2メートル近い巨体に膨れ上がった。まるで、某ゲームの某ゾンビ。

忠則は大量のゾンビを使い、人海戦術を仕掛けてきた。秋穂は数を犠牲にして、1体の強力なゾンビを生み出した。量より質に拘ったのだ。

ルパン3世、不二子、ともに銃を撃つが、巨体ゾンビの筋肉が弾いてしまう。

そこで次元大介がマグナムをぶっ放す。38口径から放たれた、3

57マグナム弾は熊も仕留める威力。

ところがそのマグナム弾も巨体ゾンビには通じず、巨体を揺らしただけ。

「マグナムが効かねえぞー！」

驚く次元大介の隣で、青龍刀も通じないと判断した炎輝が、鞘ごと背中から外すと、迷彩色の軍服を脱ぎ捨て、上半身、裸になる。徹底的に鍛え上げた、岩石のような筋肉に包まれた体。巨体ゾンビと見比べても、全く、見劣りしない。

呼吸を整えた後、巨体ゾンビに突進。

マグナムも聞かなかった巨体ゾンビが炎輝に顔面を殴られると、巨体をぐらつかせて、倒れかかる。何とか持ちこたえたようで、体勢を立て直すと同時に炎輝に殴りかかる。

殴られた炎輝も耐えきり、倒れずに反撃。

両者とも両手を掴み合つての力比べ。

「うおおおおおおおっ！」

力任せに炎輝が巨体ゾンビを持ち上げ、床に叩き付ける。すぐに立ち上がった巨体ゾンビが肩を活からせ体当たり、それを炎輝がブロック。

凄まじいとしか表現できない。殴り合い、剛力と剛力のぶつかり合い。

この対決をホールにいた全員が、啞然となってみていた。秋穂ですら、何も言うことが出来ない。

「なあ、次元よ、俺、昔、こんな怪獣映画見た気がするんだが……」

「そりゃ『フランケンシュタインの怪獣 サンダ対ガイラ』だな」

その発言通り、炎輝と巨体ゾンビの戦いは怪獣映画、そのもの。

殴り倒されても、すぐに起き上がり、殴り合う。

隙を見て、巨体ゾンビが炎輝の肩に噛みつく。ルパン3世たちは肝を冷やす。ゾンビに噛まれたら、ゾンビになる。あんなターミネーターみたいなのが、ゾンビになったら、しかも、巨体ゾンビと一緒に襲いかかってきたら、想像しただけで、どうにかなりそうだ。

ゾンビに噛まれたらゾンビになる。それは傷付くことが条件。か

すり傷でもゾンビになってしまう。逆に言えば、噛まれても傷付かなかったら、ゾンビにはならない。

こともあるうか、鍛え上げた炎輝の筋肉は巨体ゾンビの歯を通さなかった。かすり傷どころか、歯型さえ付かなかった。

「ウソだろ、オイ」

マグナムが効かなかった時よりも、次元大介は度肝を抜かれてしまふ。

「効かん、効かん、こんなもの」

笑いながら、一気に肩の筋肉を大きく揺すって、その衝撃で巨体ゾンビの顎の骨を外す。

そうやって、巨体ゾンビを引き離し、怯んだ合間に背後に回って、両手で腰をしつかりと掴む。

「どおつりやああああああああつ」

気合と共に巨体ゾンビを持ち上げ、岩石落とし、バックドロップを食らわせる。

全体重の乗ったダメージに、流石の巨体ゾンビもすぐには動けない。

「どけ、炎輝」

ホールの外から克巳の声が聞こえる。来人、五右エ門、銭形警部もゾンビを片付けてホールに救助した船客たちを引き連れて駆けつけてきた。皆、疲れた様子は見られない。ただ、救助した船客たちには疲れが見える。

指示に従い、炎輝は巨体ゾンビから飛びのく。

ホールに飛び込んだ克巳は胸パットを引っこ抜く。そこには手榴弾が仕込んであり、それを顎が外れて、開いたままの巨体ゾンビの口にねじ込む。

誰も警告を受けるまでもなく、巨体ゾンビから離れる。救助された船客たちも、その場に伏せた。

手榴弾が爆発。いくら357マグナム弾でも弾く筋肉でも、内側までは頑丈ではない。木端微塵に巨体ゾンビの頭は吹っ飛ぶ。

弱点である頭を失い、巨体ゾンビは、一巻の終わり。

救助された船客たちは爆発音に驚き、顔を上げようとせず、いまだ、震えて伏せたまま。

来人、五右工門、銭形警部、克巳は不二子から、ホールで起こったことを聞かせてもらった。

ホールにいたゾンビは全ていなくなった。船内に蠢いていたゾンビも、あらかた片付けた。まだ、残っている可能性もあるが、当分、ホールまで襲いにくる心配は無いだろう。

秋穂が新たなゾンビを作らないように、部下たちは盾になったまま、ライフルを構える。

ルパン3世、次元大介、五右工門、不二子、銭形警部、来人、克巳、炎輝は秋穂を見る。誰一人として、笑っていない。

「お嬢さん、もう、観念しな。もう一回、言うけど、そんなもん捨てちまった方がお利口さんだぜ」

諭すように語る、ルパン3世。やはり、女性には甘く優しい。

「今なら、自首扱いにするぞ」

警官である銭形警部は高校生とはいえ、犯罪者を見逃すことはできない。そこで自首を進める。

「不死、重いもの、ウトナピシユティム、アハスヴェール。皆、苦しんだ」

炎輝の言ったウトナピシユティムはギルガメシュ叙事詩に出てくる人物。旧約聖書に出てくるノアの箱舟の元になったと言われるシユメールの洪水伝説でノアに該当する。

話の筋は殆どノアの箱舟と同じだが、大洪水を生き残ったウトナピシユティムに、神々は不老不死を与えたとなっている。

アハスヴェールは、十字架を背負って刑場へ赴く、イエス・キリストが彼の家の前で休もうとしたら、汚れるのを嫌がって追い出した。この時、アハスヴェールはイエス・キリストと目が合い、今、自分がかんどもない、罪を犯してしまったことを悟ってしまう。すると、イエス・キリストは、

「次に私に会うまで、生きていなさい」
と、告げた。

結果、アハスヴェールは、次にイエス・キリストが現れる。最後の審判の日まで死ねなくなり、今でも、世界のどこかで、彷徨つていると言われている。

ウトナピシュティム、アハスヴェールの伝説は共に不老不死は、人の身には重いと言うことを伝えている伝説。

「もう止めなよ！」

耐え切れなくなって、物陰から飛び出してくる遼。

「そっだよ、こんなことしても意味なんかないじゃない！」

七美も飛び出してくる2人で親友を説得。そこには目を覚ましてほしいという、強い思いが込められていた。

秋穂は唐突に笑い声を上げるといふ、幾多の悪役の共通の行動をとる。

「ごたくはそれまでにしていただけるかしら」

ルパン3世や銭形警部、炎輝、親友の説得も空しく、通じず。残念なことに、誰の気持ちは秋穂には届かなかつた。

「私は価値のある命と価値のない命を餞別する。私にはその資格があるの」

場の空気が一気に引き締まる。一触即発の状況に突入。

「あなたたちには、私の駒なってもらわね。きつと、役に立つでしょうね。ゾンビだけど」

『始皇帝の宝玉』を構える。ルパン3世たちも身構えた。闇色の輝きを浴びたら、お終い、助からない、ゾンビになるだけ。

相手は高校生の少女、しかし、情けをかけられる相手ではない。最悪、ここにいる全員がゾンビにされる。秋穂もそのつもり。

ルパン3世、五右衛門、不二子、克己、炎輝、銭形警部は理解していた。秋穂は女子子供の領域を越えてしまっている。許すことは出来ない相手であるこちを。

お互いが間合いとタイミングを計り合う。

「秋穂さん、それは紛い物だよ」

静かに来人が言つて、前に進み出る。しゃべり方こそ、普段の優しいものだったが、雰囲気が違う。

ルパン3世を始め、何度も死線を潜り抜けたものだけが、そのことに気が付いた。

「何を仰っているのかしら、来人さん？」

そのことに秋穂は気付いていない。彼女は、ずっと、温室暮らし。苦労などしたこともない。だから、気が付かず、見下すような笑顔で答えた。

「言葉通りだよ、それは紛い物。それも劣化コピーに過ぎない」

先程、以上に秋穂は笑った。さも楽しそうに笑った。こんな時にも、お嬢様らしく、上品に笑っている。

「ハツタリはお止めなさい。さもないと、来人さん。あなたから、命を奪って差し上げることになりますわ」

『始皇帝の宝玉』を来人に向けた。脅しではない、秋穂は本気で命を奪う。今や秋穂には罪を後悔する気持ちは微塵も存在してはいない。「止める！」

何としても秋穂を止めようとする遼、七美も続く。ところが部下に阻止されてしまう。今、秋穂の前に出るのは自殺行為以外の何物でもない。

「紛い物に僕の命は奪えない」

この台詞を挑発と受け取った秋穂は迷うことなく、笑顔を浮かべたまま、来人に向けて闇色の輝きを放つ。

その輝きに来人は手袋に包まれた右手を向ける。来人にも躊躇いはない、自分の正しいと思った道を進む。そのためには、父親でも、恩人であっても、立ち塞がったときには容赦はしなかった。今の来人の眼差しはあの時と同じ。

手袋に包まれた右手から、闇色の輝きが放たれた。その輝きはルパン3世、不二子、次元大介、五右衛門、銭形警部、克巳、炎輝には見えた。部下たちが盾になっっている遼や七美、船客たち。伏せたまま恐怖のあまり頭を上げることの出来ない、救助された船員には見えなかった。

根源たる死の恐怖を呼び起こす『始皇帝の宝玉』の闇色の輝きに似ている輝き。だが、来人の右手から放たれた輝きは『始皇帝の宝玉』よ

りも、遥かに死への恐怖を呼び起させた。同時に、優しく暖かな感覚や、安らぎも感じさせた。何より、神々しささえ、ルパン3世たちに感じさせている。

「その光は一体……」

何が起こったのか、全く分からない秋穂。何故、来人の命を奪い、ゾンビに変えることが出来ないのか。何故、来人の右手から闇色の輝きが放たれたいるのか。

それでも秋穂は『始皇帝の宝玉』から、がむしやらに闇色の輝きを放ちつつける。

ピシッ、微かな音共に『始皇帝の宝玉』にヒビが入る。

「！」

驚く秋穂の目の前で、ヒビは広がっていき、そして『始皇帝の宝玉』は砕け散り、放っていた闇色の輝きは霧散する。

「わ、私の『始皇帝の宝玉』が！ 終わることのない生と不老の体が！

こんな事、こんな事、認められませんわ」

必死になつて、散らばった『始皇帝の宝玉』の破片をかき集める。もう、死を思い起こさせる恐怖は感じない。先程の傲慢な態度の反射効果なのか、必死になつて欠片を集める秋穂の姿は、どこか、滑稽で哀れに見えた。

いつの間にか、来人の右手の輝きも消えている。

破片を集めている秋穂の手に、異変が起こる。手に皺が生まれたのだ。

「なに、これ……」

驚いた秋穂は己の手を凝視。皺は深くなり、どんどんと刻まれ、増えていく。

異変は手だけではない。顔にも皺が刻まれ、髪の毛の色は、黒から、灰色、白へと変わっていった。

急激に老化していく秋穂。まるで、ビデオの早送りのように。

思わず顔を伏せた七美を遼は抱きしめる、彼の顔も辛そう。

「いやあああああああああああああああつ」

しわがれた声で、絶叫する秋穂をルパン3世は、悲しそうな顔で見

つめた。
「これが命を弄んだものへの罰か……」

エピソード

炎輝（イエンフウイ）の部下たちが船内を見回る。時々、残っていたゾンビと遭遇するも、これらを難なく、片付け、用心のため、もう2周、船内を見て回り、もう大丈夫と判断、安全宣言を出す。

安全宣言は出されたが、ほとんどの船客はホールから動こうとはしない。やはり、まだ恐怖は消せない。

ゆっくり、戸羽丸は近くの港を目指す。

甲板の一角に來人、ルパン3世、不二子、次元大介、五右衛門、克巳、炎輝が集まる。辺りにはこの7人以外、誰もいない。

この7人は來人の右手の輝きを見たもの。

右手の手袋を外す來人。手の甲には薄い色から濃い色に変わるグラデーション金色の痣のようなものがあつた。まるで鎌を持った死神のようなデザイン。見るものに背筋を凍らせるような感覚、包み込むような暖かな安らぎの感覚を与え、神々しい感じさえも漂わせていた。

「これ何？ 痣、それとも、刺青？」

さも珍しそうに手の甲を眺め、不二子は触れようとす。

「それが本物（オリジナル）か」

ルパン3世の言葉を聞いた不二子は『始皇帝の宝玉』のことを思い出し、慌てて手を引っ込める。

頷く來人。『始皇帝の宝玉』が紛い物なら、來人の手の甲にあるこれこそ本物。

「人をゾンビに変える力はないけどね」

再び手袋をはめ、手の甲を隠す。

「それで、何で、お前の手にそれがあるんだ？」

次元大介の質問は、最もな疑問。

紛い物の『始皇帝の宝玉』でも、あれほど、恐ろしいことが出来た。本物となれば、どれ程の力があるのだろう。もしかしたら、世界を滅

ぼすことも出来るかもしれない。

見た目は中学生ぐらいの子供の来人の手の甲に、何故、そのようなものがあるのだろうか？ 疑問に思うのは当然のこと。

「僕はこの紋章の守り人なんだ。邪な奴から守るためのね」

自分の前の継承者にして、親友、テッドが最後の『一生のお願い』として、こいつを守ってくれと頼んできた。あれほど、必死のテッドの顔を来人は見たことはない。あの日から、この『生と死を司る紋章』を守ると誓った来人。

あれから、長い、長い時が過ぎていった。それでも、あのころの夢を見ることはある。決して忘れることのできない思い出。

「ねえ、あなたは終わることのない生と不老なの？」

興味津々に不二子は聞いてくる。やはり、不老は彼女の興味を引いたようである。

「それは呪いだよ」

炎輝が言った不死は重いもの。それを抱えている来人。それに加え、右手の紋章。来人が、これまで、どれ程の過酷な世界を歩いてきたことだろう。

背負わされたものを背負いきる強さ、それ故に鍛え上げた鋼のような心と体を持ったことを。

「さて、今後のことだがな」

咳払い一つして、急に銭形警部は話題を変えた。

「お前たちのことだ」

克巳と炎輝を見た。港では警官隊が待ち構えている、海の上では逃げ道はない。今回のことは、シージャックに乗じて、忠則が身代金の横取りを画策。全ての罪をシージャックに着せて、自らは金を得る。船客を殺したのも忠則。

その犯行がばれて、娘の秋穂と共に海に身を投げたと報告しておいた。忠則の遺体は船客に偽装している。

無理があるのは承知だが、事実を話すわけにもいかず、こんな話に落ち着いた。

「分かっている、抵抗するつもりはないよ。ただ、S国のことかね……」

克巳の心の残り。

「それなのだが、本官に考えがある」

ホールに銭形警部が克巳を引き連れて、現れたとき、船客たちは何か異変が起こったのか、まだゾンビの生き残りでもいたのか。不安な気持ちがい起こさせた。

「ようやく、事態が收拾したばかりで済まんが、聞いてもらいたいことがある」

ホールにいた船客たちは、皆、銭形警部に注目。

「S国というのをしつとるかね」

船客の中には知っているものもいたし、知らないものもいた。知らないものには銭形警部が説明。

忠則がS国への義援金の横領したに話に及ぶと、嫌悪感を露わにするものが、多く、現れた。何せ、忠則は今回のゾンビ事件の主犯。多くの命を奪った悪の権化。腹が立つのも自然。

克巳たちがシージャックしたのも、身代金を集め、S国にその金を流し、貧困に苦しんでいる民を救うためだったと、銭形警部は話す。

「やり方は間違っておったが、純粋にS国を助けたいと言う気持ちは汲んでやりたい。どうだろ、皆でS国に寄付金を募ってもらえないだろうか」

話を聞き終えた船客たち。元から親しいものや、船内で仲良くなった者たち、赤の他人同士が話し合う。

シージャックが始まったときは怖かったし、恨みもした。その後、ゾンビが現れたときにはシージャック犯たちが助けてくれた。

船室で震えていたところを救出された船客も多い。

「分かった。少しばかりだが、出そう」

裕福そうな恰幅のいい男が言ったのをきっかけに、あつちこつちで寄付金を出そうと声が上がっていく。

「これで、いいだろうか」

小声で尋ねる銭形警部に克巳は頷く。その顔は『あんたには負けたよ』と語っていた。

炎輝の手には袋。その中には砕けた『始皇帝の宝玉』が入っている。「ごめん、大切なものを砕いてしまっただけ」

仕方がなかったはいえ、『始皇帝の宝玉』を砕いてしまったことを来人は詫びた。

「砕けてしまっても『始皇帝の宝玉』は『始皇帝の宝玉』であることは変わらず。これを兵馬俑に持っていけば、祖父の代からの宿願が果たされることも変わらず」

その後、再び、来日して、自首するつもり。

ベットの上で眠る老化した秋穂、今は薬で熟睡している。部屋には遼と七美がいる。

遼と七美は部下たちが盾になっていたので、何が起こったのか見えてはいない。気付いたら、秋穂が老化していて、『始皇帝の宝玉』が砕けていた。

秋穂のやったことは許せることではないが、それでも秋穂は遼と七美の親友には違いない。

憎しみや悲しみなどが混ざり合った複雑な感情が2人の中を巡る。今回の恐ろしい事件は遼と七美の仲を急速に近付けさせた。

ルパン3世たちは救命艇を降ろす。一応、見張りの警備隊がいたが、不二子の色仕掛けでひきつけて、五右衛門が当身で気を失わせた。「もう行っちゃおうの?」

と、来日から声がかけられた。手には天牙棍が握られているが攻撃の意志はなし。

「ああ、港には怖いお巡りさんが待ち構えているからね。今のうちにおさらばさ〜」

手をぶらぶらさせ、お別れの仕草を取るルパン3世。

「今回は骨折り損のくたびれ儲けだね」

これは嫌味でなく、愛想。ルパン一味もそのことは承知。

「こんなのはいつものことさ」

ルパン3世が好きなのはお宝を鮮やかに盗み出す行為そのもの。
お宝は、そのおまけ。

ルパン一味を乗せた救命艇が走り去って、見えなくなったころ。銭形警部が駆けつけてきた。

「また逃げられたか。おのれ、ルパン！」

悔しそうな表情と共に、必ず次こそは逮捕すると、拳を握りしめて意思表示。

海上を走る救命艇。舵を握るのは次元大介。

おもむろに不二子は胸の谷間から、黒いカードを取り出す。

「不二子ちゃん、それはまさか！」

そのカードが何なのか、ルパン3世は一目で分かった。

「20億のカードよ。ただで逃げるのは悔しかったから、掏摸取っておいたの♡」

見せびらかすように黒いカードを振る。ルパン3世がうらやましそうに見ているのは、カードか谷間か。

「転んでもただは起きぬ女でござるな」

感心したようにも呆れたようにも聞こえる。

「全くだ」

次元大介は笑い出す。

戸羽丸が港に着いた。克己たち犯人グループは抵抗することなく、護送車に乗り、運ばれていく。

事件を聞きつけたマスコミの猛襲、慣れていない船客たちは戸惑いを見せる。

そんなマスコミの隙をつき、こっそりと来人はキャンピング車で出て行こうとする。

「行くのか」

話しかけてきた銭形警部。

「うん」

終わることのない命、不老の体。その呪いを受けてまで、右手の紋章を守る来人。その話は嘘ではないと、銭形警部は解っていた。

「これから、どこへ行くんだ？」

この先の来人の旅路は長い。

「いろいろと、見て回るつもりだよ。風の向くまま、気の向くまま、世界の端の端まで」

ペダルを踏みしめ、手を振りながら去っていく。それを敬礼で見送る銭形警部。

この先も長い長い旅路を歩む。それを成し遂げる鋼の強さを来人は持っている。